



ペット由来外来種 日本における現状と課題



目次

はじめに	3
目的	5
第1章 ペット由来の外来種	6
第2章 ペット由来外来種の影響—ケーススタディ	11
第3章 今後リスク評価が必要な種の特定—ペット由來 外来種をこれ以上増やさないために	19
参考文献	29
別添	32
表1B 日本で外来種として認識されている主な種	
表1C 対応表:各都道府県の外来種の分類と本稿における分類	

はじめに—外来種問題とは？

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成16年法律第78号。以下「外来生物法」という）が施行されて20年が経過し、外来種・外来生物という言葉はすっかり浸透した（環境省, 2011）。

人の手により、その生物の従来の生息地から地理境界線を越えて移動させられた生物が、新たな土地で定着した場合、外来種、または外来生物¹と呼ばれる。必ずしも海外がその生物の従来の生息国である必要はなく、国内に生息する在来種であっても、人為的に本来生息していない土地に導入されれば外来種（国内由来の外来種）となり得る。そのうち、在来の生物・生態系や人の暮らしに悪影響を与える種を侵略的外来種（Invasive Alien Species; IAS）という。科学的に信頼性のある独立した最新の情報提供することを目的に設置されている生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学 - 政策プラットフォーム（Intergovernmental Science-Policy Platform on Biodiversity and Ecosystem Services; IPBES）の「地球規模評価報告書（IPBES, 2019）」において、IASは、生物多様性損失の5つの主要な直接要因の1つであることが示されている。さらにIASは、今後も増加することが予測されている（IPBES, 2023）。こうした科学的な情報を基に生物多様性条約（Convention on Biological Diversity; CBD）の第15回締約国会議で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組（Global Biodiversity Framework; GBF）」においても、新たなIASの導入と拡散の防止は、明確なターゲットとして位置づけられ（CBD, 2022）、世界的に対応すべき優先度の高い環境課題であると認識されている。本邦の生物多様性国家戦略2023-2030（環境省, 2023）においては、GBFターゲットを踏襲したIAS対策が行動目標として位置づけられているほか、文書中の各所に「外来種」という用語が73回も登場することから、環境省がこの問題を重要視していることが推測される。生物多様性国家戦略において、具体的な施策として外来種被害防止行動計画（以下「行動計画」という）及び生態系被害防止外来種リストの見直しを行なうことが掲げられている。2025年3月、行動計画の第2版が公表された（環境省他, 2025）。行動計画は、外来生物法第3条で策定が規定されている特定外来生物被害防止基本方針を基に我が国の外来種対策全般に関する中期的な総合戦略と位置づけられ（図1A）、第2版では、2015年に公表された第1版の積み残しを踏まえ、多様な主体間でのデータ共有とモニタリング体制の強化、優先度づけの高度化、国内由来外来種・遺伝的攪乱への対応や評価指標の明確化が図られ、各主体が果たすべき役割と取るべきアクションが具体化されている。

¹ 外来生物法においては、海外から我が国に導入されることによりその本来の生息地または生育地の外に存することとなる生物（その生物が交雑することにより生じた生物を含む）と定義される。

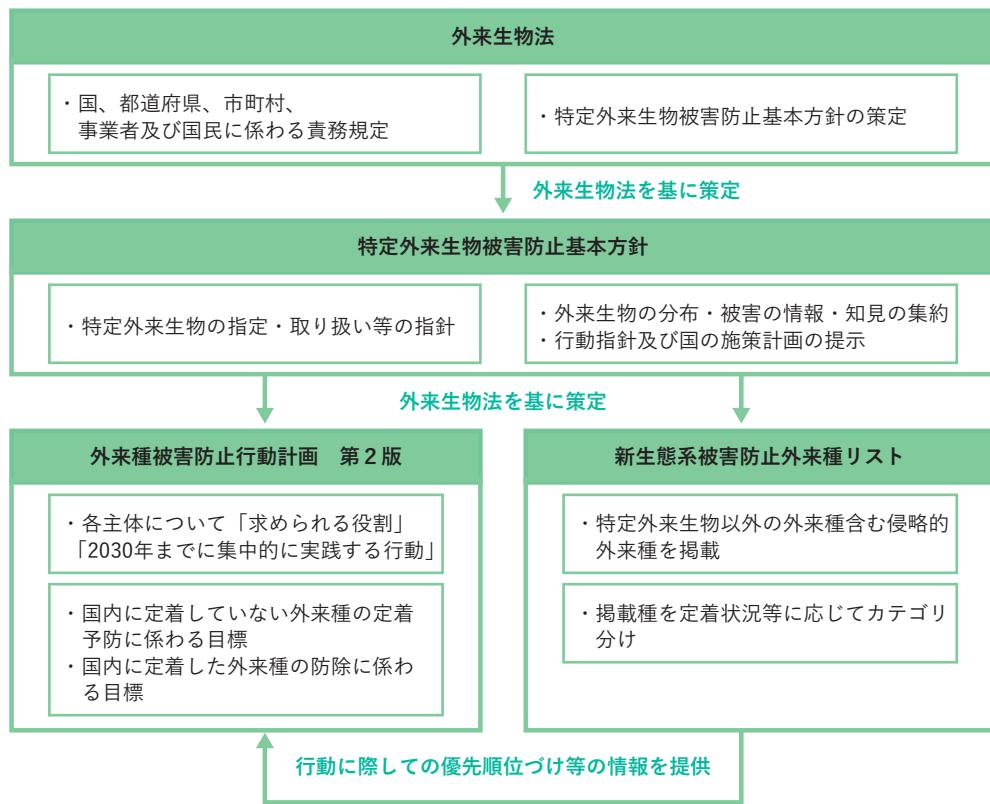


図1A 外来生物法、特定外来生物被害防止基本方針、行動計画及び生態系被害防止外来種リストの関係

出典：外来種被害防止行動計画第2版（環境省ほか, 2025）

目的

現在、2026年3月の公表に向け、改訂作業が行なわれている2015年版の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」には、植物200種、動物229種が掲載されている。これらの種が外来種となった経緯はさまざまだが、今回、一貫して生きた状態で利用されるという特殊性から愛玩・鑑賞目的の利用のために導入され、その後外来種となった種（以下「ペット由来外来種」という）に注目する。欧州においても、外来種化した脊椎動物の主な導入経路は意図的な放逐であることが過去の研究で示されている（Hulme et al., 2008）。なお、対象とする動物の範囲は、国際・国内ペット市場で取引される主要分類群であり、動物の愛護及び管理に関する法律（昭和48年法律第105号）の事業規制対象となる、哺乳網、鳥網及び爬虫網に属する動物に限定した。本稿は、こうした種のうち、すでに日本の生態系や人の暮らしへのネガティブな影響が顕在化している種の具体例を示すとともに、野生動物のペット取引監視を目的に収集した国内で取引されている種の情報を国際的な外来種の既存データベースと照合し、今後日本でペット由来外来種となる潜在リスクのある種も示している。

世界中から多種多様な生きた野生動物を輸入し、ペットや展示用に取引する日本が、生物多様性回復という目的を達成するため、野生動物利用・取引をどう考え、取り組むべきかを考える一助としたい。



© Ola Jennersten

第1章 ペット由来の外来種

愛玩対象から厄介者へ

2025年は、外来生物法が施行されて20周年にあたる年であった。日本における外来種問題は、1990年頃から広く認識されるようになってきた。外来種とは、「人間の活動によって他の地域から持ち込まれた生物」と定義され、人の活動に伴って、意図せずあるいは無意識的（非意図的）または、意図的に、概ね明治期以降に日本へ持ちこまれた種とされている（環境省, 2012）。非意図的なケースは、昆虫、カエル類や一部の爬虫類で報告されているように荷物・貨物へ入り込んで運搬されたり（環境省, 2012）、近年被害が拡大しているクビアカツヤカミキリ*Aromia bungii*のように輸入された商材（この場合は木材）や梱包材に混入して持ち込まれたりする（埼玉県生物多様性センター, 2024）のが主であろう。さらに、小笠原諸島で在来かつ固有の陸棲巻貝に壊滅的な被害を与えていたリクウズムシのように土壤に混入して持ち込まれた（森林総合研究所, 2006）種もいる。意図的な導入は、コウライキジ*Phasianus colchicus karpowi*、ブラックバス（オオクチバス）*Micropterus salmoides*に代表される狩猟・釣り対象種、ヌートリア*Myocastor coypus*のような毛皮目的、本稿で注目している愛玩・鑑賞目的（以下、ペット目的という）及び動物園やふれあい施設等での動物の展示・ふれあい利用、マングースのように駆除対象種の天敵としての導入（ペストコントロール目的）などが挙げられる。狩猟・釣り対象及び天敵としての動物の利用は、自然環境に放つことによって行なわれるため、その地に生息している野生生物（在来種）へ直接的な影響を与えるのはいうまでもない。

ペットや展示利用は、通常、人が管理した環境で行なわれるが、食用や毛皮利用目的とは異なり、動物は、輸入・誕生時から、事業者が国内で流通させる間、消費者の手元に届いた以降も生きた状態が維持されるため、必然、逸走の可能性がより高くなる。さらに飼育が困難になった場合に野外に遺棄されることも決して珍しくない。最新の「動物の虐待事例等調査報告書（環境省, 2022）」によると、2018年から2022年の事例として、犬・猫が主ながら、イエウサギ、タヌキ、ニワトリ、カナリヤ、ハムスター等の遺棄が報告されている。この中には、個人飼育者のほか動物園やペットショップ職員の関与が示されている事例もある。

表1Aは、2015年版生態系被害防止外来種リストに掲載される各分類群の動物のうち、2025年11月時点でのペット目的の広告または展示の利用が確認された、もしくは、国立環境研究所侵入生物データベース（<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/index.html>）及び文献においてペット・展示の利用に言及されている種の割合を示す。

哺乳類においては、40%以上、鳥類及び爬虫類では、80%以上の種がペット利用対象種であることが分かる。家畜として導入され、野生化し外来種となって、現在はペットとしても取引されているという例もあるため、この結果が直ちに、これらの種が導入された目的がペット利用であるとは言い切れないが、多くの種がペットや展示を目的に日本へ輸入されたり、国内の他地域から持ち込まれたりしたと考えられる。

表1A 2015年版生態系被害防止外来種リスト掲載種のうち、ペットまたは展示利用されている種の割合

	掲載数	ペット利用	展示利用 ^{※2}
哺乳類	41種	17種 ^{※1} 41.5%	18種
鳥類	15種	12種 80%	3種
爬虫類	26種	25種 96%	なし

※1 タヌキ*Nyctereutes procyonoides*を含めると18種、43.9%となる。ただし、国内でペットとして利用・取引されているタヌキが生態系被害防止外来種リストへ掲載されている奥尻島などのタヌキであるか定かではない。

※2 動物園等で展示利用されている種数（ペット利用種を除く）。国内由来種については、リスト記載の地域は考慮せず、種としての利用の有無で集計した。

導入の目的

より広くペット利用の外来種化への影響を把握するため、生態系被害防止外来種リストに加え、国立環境研究所の侵入生物データベース、各都道府県の外来種リストなどに掲載されている外来種の情報を収集し、集約した（巻末表1B）。今回、37の都道府県について、各都道府県が独自に作成している外来種リストまたは外来種対策に関する情報を参照した。外来種への取り組みの程度の差は大きく、外来生物法で指定される特定外来生物のうち、当該都道府県で確認されている種をリストアップするだけのケースがある一方、独自に専門家の力を借りて評価基準を作成し、評価を行なった外来種リストを制作しているケースもあった。それぞれの都道府県版外来種リストでは、外来種の及ぼす影響や深刻度に応じてカテゴリを設定しているが、そのカテゴリの設定は同一ではないため、「①定着しており対策が必要な外来種」、「②定着しているが特に影響が確認されていない、または小さい外来種」、「③定着していない（または不明だ）が予防が必要な外来種」及び「④その他」にカテゴリを再設定して（巻末表1C参照）示した。

表1Bに掲載した外来種が本来の生息地ではない日本や国内他地域へ持ちこまれた理由を見てみる

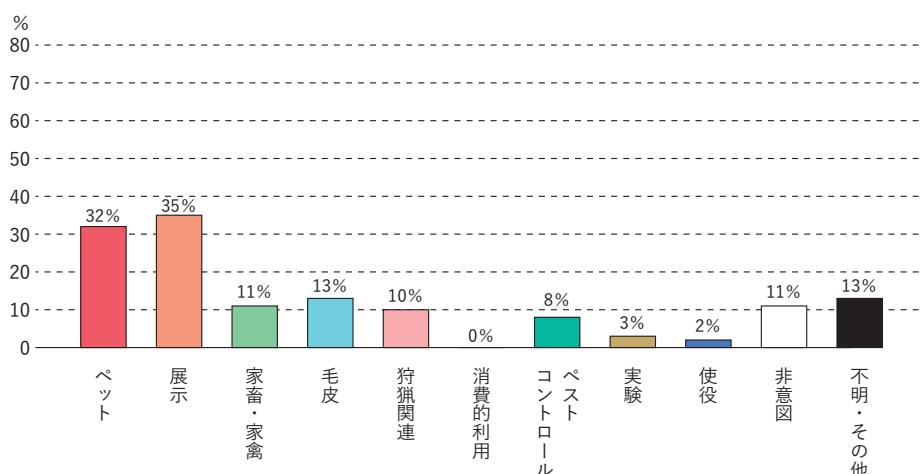


図1B 外来種となった動物種の輸入・移入目的（哺乳類）

複数の目的で利用されていた種/分類群も存在するため、合計は100%を超える。

例) カイウサギ*Oryctolagus cuniculus*は、毛皮、食肉及びペット利用のために輸入・移入された。

と、国内由来外来種を含む哺乳類の外来種62種/分類群のうち、観光施設などでの展示目的の導入が最も多く22種/分類群、ペット目的が20種/分類群、毛皮利用目的が8種、家畜利用目的の種は7種、狩猟対象とするために持ち込まれた種は6種/分類群、ハブ駆除のようなペストコントロール目的が5種、その他が3種、非意図的移入や目的不明が15種であった（図1B）。

鳥類67種においては、ペット目的がもっとも多く51種、展示42種、狩猟対象及び狩猟犬の訓練目的が7種、家禽6種、式典などでの放鳥目的2種、食用2種、使役目的が1種であった（図1C）。

爬虫類も同様にペット目的の持ち込みが最も多く80種/分類群のうち、61種/分類群であった。次に多かったのが展示目的で35種/分類群、貨物への混入など非意図的な持ち込みが10種、薬用・食用など消費的利用目的が8種、ペストコントロール目的2種、不明が8種であった（図1D）。

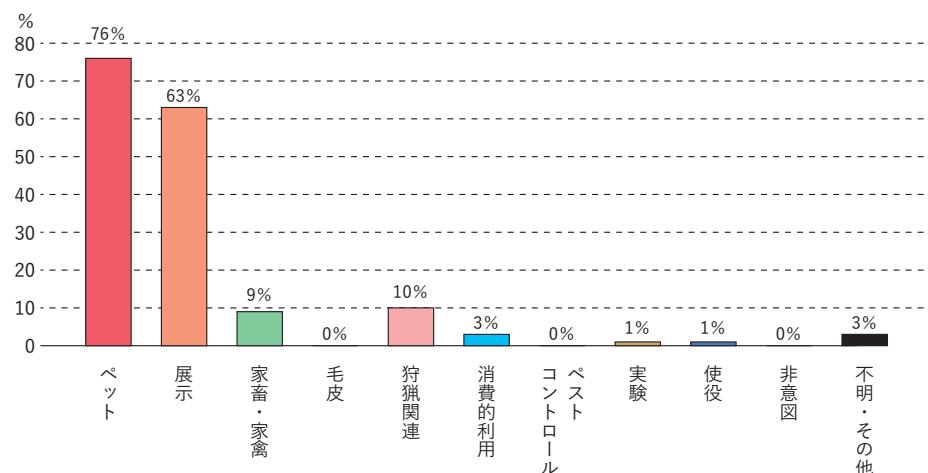


図1C 外来種となった動物種の輸入・移入目的（鳥類）

複数の目的で利用されていた種/分類群も存在するため、合計は100%を超える。

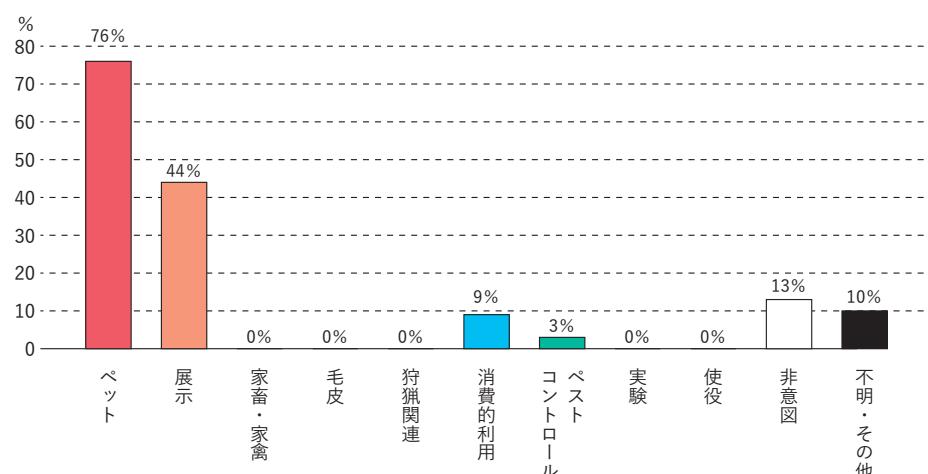


図1D 外来種となった動物種の輸入・移入目的（爬虫類）

複数の目的で利用されていた種/分類群も存在するため、合計は100%を超える。

哺乳類においては、展示目的で持ち込まれ飼育されていた個体が、逸走、遺棄されるなどして野生化して外来種となった種が最も多く、鳥類及び爬虫類においては、ペットとして飼育されていた個体の籠脱け、逸走、遺棄が主要な外来種化の要因とみられる。

これは、Gippet & Bertelsmeier (2021) による外来種化とペット市場での商業的成功の相関を示した統計学的研究及びLockwood et al. (2019) のエキゾチックペット取引が、数多くのIASの発生につながっていることを明らかにした研究とも整合するものである。

定着

意図的、または非意図的に日本または、国内の他の地域へ持ちこまれ、自然環境下に放出されるだけで、人の管理下にあった種が、直ちにIASとなる訳ではない。まず放たれた環境に定着できるかが重要である。新たな環境で生き延びるには、導入先でニッチを獲得する必要がある。これには、温度、湿度といった物理的環境、エサ、身を隠す場所などの資源、そして、捕食者や病原体の有無などが関係する。こうした「ニッチ機会」から外来種の定着可能性や侵略性の評価を行なうことが有効とされている（鷺谷, 2007）。

さらに導入された地域で従来このニッチを占めていた群集が人為的な環境改変の所為で崩壊していた場合は、外来種のニッチ機会は増大する（鷺谷, 2007）。定着とは、「継続的に生存可能な子孫をつくることに成功する過程のこと」（環境省、外来種用語集）とされているとおり、次のステップは、繁殖である。次世代を残すためには、伊豆諸島などに侵入しているブラーミニメクラヘビ *Ramphotyphlops braminus* のような単為生殖する一部の種を除き、繁殖のパートナーとなる個体が必要であり、一般に野外に放出された個体が相当数存在することが必要である。また、外来種の定着性には、導入圧、すなわち導入された個体数や回数が大きく影響することが示されており（Simberloff, 2009）、どのくらいの数が、どのくらいの期間にわたって利用されているかは、導入された種の外来種化リスクの高低に大きく関わる。

ペット由来の外来種においてもその取引量及び期間という要素は重要であり、特定外来生物に指定されているアライグマ *Procyon lotor* (第2章)、クリハラリス *Callosiurus erythraecus* やガビチョウ *Garrulax canorus*、条件つき特定外来生物のアカミミガメ *Trachemys scripta* (若尾, 2025) も大量に輸入され、輸入開始の数十年後に取引・飼育が禁止されるまで、継続的に野外放出が続いたとみられる。

外来種と感染症

外来種がもたらす人への負の影響の一つとして動物由来感染症（人獣共通感染症）の伝播が挙げられる（環境省, 2023）。COVID-19パンデミック下では、世界的に動物、特に野生動物取引に伴う感染症拡散リスクへの認識と感心が高まった（UNEP-WCMC & JNCC, 2021; Wikramanayake et al., 2021）。その後の世界的な野生動物取引量の回復は、このリスクへの認識が十分に浸透しなったことを意味するのかもしれないが、動物由来感染症が、重大な懸念であることには変わりないため、人や家畜と共に通する感染症に関する情報の有無についても表1Bへ含めた。ただし、感染症に関する情報を別途収集したのではなく、国立環境研究所の侵入生物データベース、各都道府県の外来種リストや文献にヒト以外の他の動物や人に感染する病原体への感染事例が掲載されていた場合に記録をしたものであり、かなり情報源が限定されている。

哺乳類において、他の動物と共に感染症の病原体を保有していることが報告されていた種は19種（29%）であった。人獣共通感染症については、21種（32%）であった。具体的には、狂犬病、疥癬症、レプトスピラ、トキソプラズマなどである。

鳥類においては、他の動物及び人へ感染する疾病的病原体を有する種はそれぞれ13種（19%）であった。具体的には、オウム病と鳥インフルエンザの記録によるものであるが、鳥インフルエンザウイルスは、感受性の差こそあれ、すべての鳥類が感染し得ると考えられるため（Wallensten, 2007）、すべて鳥類の外来種が感染症を媒介する可能性があると解するべきであろう。

爬虫類においては、他の動物と共に感染症に関する情報が掲載されていたのはヒヨウモントカゲモドキ*Eublepharis macularius* 1種のみであった（1.3%）。鹿児島県徳之島の固有種で絶滅危惧種のオビトカゲモドキ*Goniurosaurus splendens*に致死的な原虫クリプトスピリジウムを媒介する恐れが指摘されている。人獣共通感染症については、カメ目4種（5%）にサルモネラ症に関する記載があるが（他の動物と共に感染症もある）、爬虫類はサルモネラの保菌率が50～90%と高いことから（厚生労働省, 2013）、鳥類における鳥インフルエンザウイルス同様、爬虫類に共通するリスクと言える。

感染症拡大に対する外来種の影響には、2つの類型がある。1つ目は、外来種が、新たな感染症の病原体やそれを媒介するベクターを伴って導入されることである。具体例として、20世紀の養狐業目的のキツネ及びエサとしてのネズミの人為的導入に伴うエキノコックス（多包条虫）の北海道への侵入である（Hayashi et al., 2023）。2つ目は、外来種が生態系に侵入したことで従来から存在していた病原体やベクターの挙動が変化することである。どちらにおいても感染症拡大のリスクを高める方向に作用していることが、具体的な事例で示されている（Burkett-Cadena et al., 2021; 亘, 2025）。亘（2025）は、生態系保全や経済活動への悪影響のみならず、感染症対策という公衆衛生の面からも外来種問題をとらえる必要性を強調している。気候変動により、温暖化が進むことで蚊やダニなどの生息可能域や活動期間が拡大し、ベクターが媒介する感染症拡大リスクが高まっていると指摘される中（Ryan et al., 2019; 国立環境研究所, 2022）、外来種によって感染症リスクがさらに高まるのは公衆衛生上避けるべきである。行動計画第2版においても「外来種対策を通じた寄生生物・感染症対策」は、すべての主体がアクションをとるべき「行動6」として設定されている（環境省ほか, 2025）。

第2章 ペット由来外来種の影響

ペット由来の外来種の中には、生態系、経済、社会、そして人間の福祉に重大な損害をもたらした種がいくつか存在する。本章では日本においてその顕著な事例である、アライグマ*Procyon lotor*、及びグリーンアノール*Anolis carolinensis*について、IASとしての影響を検証した。また、米国におけるバーミーズパインソーン*Python bivittatus*の事例も示す。

アライグマ

アライグマは北米及び中米原産であるが、現在ではアジア及びヨーロッパ諸国を含む31カ国へ導入されていることが知られている（GBIF, 2023b）。

日本におけるアライグマの最初の導入記録は1962年に遡り、愛知県内の動物園から飼育個体が脱走した事例が確認されている（揚妻-柳原, 2004）。特に1977年に日本のアニメ「アライグマラスカル」が爆発的人気を博した後は、相当数が日本に輸入されたとされる（農林水産省, 2018）。人々は愛らしい外見に魅了されペットとして飼育を始めたが、成長に伴い攻撃性を示すこともあり、飼いきれなくなった飼育者により野外に放たれるケースが相次いだ。現在日本では沖縄県を除く46都道府県での生息が確認されている（環境省, 2025）。

2005年に外来生物法が制定された際、アライグマは「特定外来生物」に指定され、その輸入、販売、移動、飼育、繁殖、野外に放つことなどが違法となった。日本政府及び全国の自治体は数十年にわたりこの種を駆除する取り組みを続けており、図2Aに示すように捕獲頭数は全体的に増加傾向にある。この傾向が効果的な捕獲の成功を示すのか、野生個体数の増加を示すのか判断は難しいが、この種が根絶には程遠い状態にあることは疑いようがない。

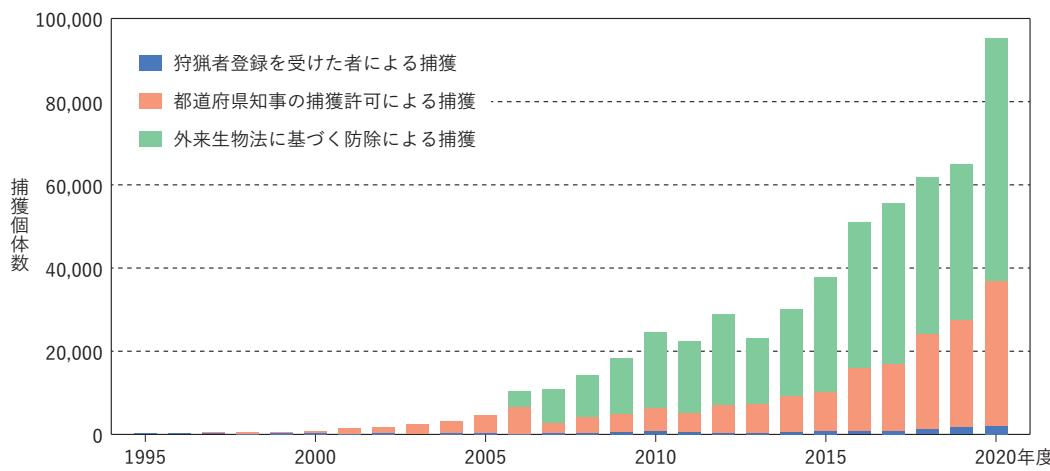


図2A アライグマ捕獲数の推移

環境省ウェブサイト「鳥獣関係統計」を基に作成（環境省, 2020）。

生態系への影響

アライグマは日本の在来生態系に甚大な影響を与えていていることが知られている。本章で検討する主な事項は、捕食パターンと在来種との競合である。

在来種の捕食

アライグマは雑食性動物であり、両生類、魚類、甲殻類、昆虫、鳥の卵や雛、小型哺乳類、爬虫類の卵など、幅広い動物相を捕食対象とする。都市部や郊外での生活に適応しているとはいえ、本来は湿地環境を好み (Timm et al., 2016)、こうした環境には保全のリスクが高い種も生息している。

アライグマによる日本固有種の捕食が専門家から報告されており (栗山 et al., 2021; 栗山 & 沼田, 2020; 国土交通省 & 環境省, 2015; 札幌ザリガニ研究会, 2025) 表2Aに示すように、その一部は環境省が公開している「環境省レッドリスト」にも掲載されている。アライグマが直接的に種の絶滅を招いた証拠はないものの、捕食対象種の一部は限られた狭い地域にのみ生息しているため、地域におけるアライグマの存在が将来的に及ぼす影響については大いに懸念がある。

表2A アライグマによる捕食が確認されている固有種

種名	環境省レッドリスト 2020における選定状況
アベサンショウウオ <i>Hynobius abei</i>	絶滅危惧 I A類 (CR)
ニホンザリガニ <i>Cambaroides japonicus</i>	絶滅危惧 II類 (VU)
トウキョウサンショウウオ <i>Hynobius tokyoensis</i>	絶滅危惧 II類 (VU)
セトウチサンショウウオ <i>Hynobius setouchi</i>	絶滅危惧 II類 (VU)
ヤマトサンショウウオ <i>Hynobius vandenburghi</i>	絶滅危惧 II類 (VU)
カスミサンショウウオ <i>Hynobius nebulosus</i>	絶滅危惧 II類 (VU)
トノサマガエル <i>Pelophylax nigromaculatus</i>	準絶滅危惧 (NT)
サッポロマイマイ <i>Euhadra brandtii sapporo</i>	準絶滅危惧 (NT)
エゾサンショウウオ <i>Hynobius retardatus</i>	情報不足 (DD)

在来種との競合

外来種は在来種との競合を引き起こすことで、地域の生態系を乱すことが知られている (Catford et al., 2018)。

アライグマとタヌキ（亜種として北海道にのみ生息するエゾタヌキ *Nyctereutes viverrinus albus* を含む）との間で、生息地や餌をめぐる競合の可能性が報告されている。ただし、アライグマがタヌキの存続に重大な脅威を与えていていることを示す直接的な証拠はない (池田 et al., 2004)。

また、フクロウ *Strix uralensis* はアライグマのように樹木の大きな空洞を営巣地に好む傾向があるため潜在的な競合が報告されている (Kobayashi et al., 2014)。

農業・経済への影響

アライグマは様々な悪影響をもたらしているが、特に被害が大きいのは、スイートコーン、コメ、イチゴ、スイカ、ブドウなどの農作物への被害である。日本全体の農作物被害量は変動傾向にあり、図2Bに示すように、2018年にピークに達した後、数年間は減少傾向、その後再度増加傾向となっている。

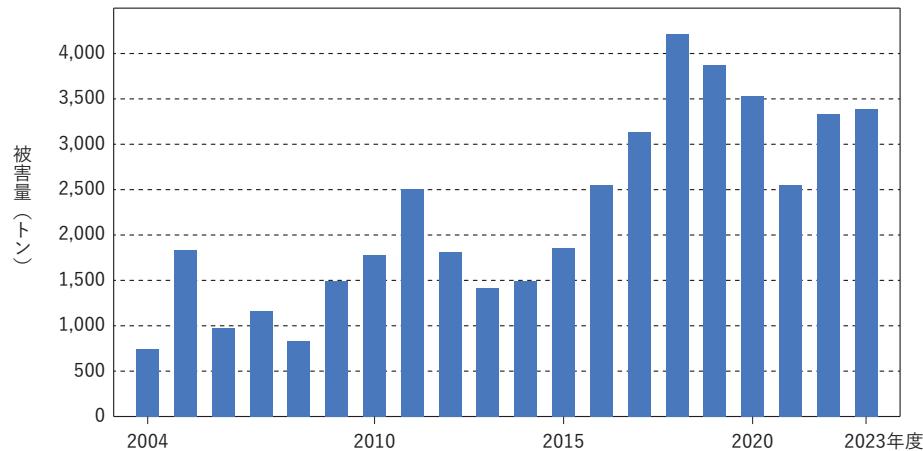


図2B 農作物被害量の推移

図2Bは、農林水産省のウェブサイトで公開されている「農作物被害状況」を基に作成した（農林水産省, 2023）。

農作物被害による経済的損失は全体的に増加傾向を示し、2023年には4.8億円と過去最高を記録した（図2C）。



図2C アライグマによる農作物被害額の推移

図2Cは、農林水産省のウェブサイトで公開されている「農作物被害状況」を基に作成した（農林水産省, 2023）。

言うまでもなく、アライグマは個体数管理を目指すすべての関係者の予算にも大きな負担をかけています。外来種対策予算のレビューによると、アライグマ駆除対策を実施した自治体では、1頭の捕獲に平均2万円かかったと報告している（財務省、2025）。これは、2020年に日本全国で約10万頭を捕獲するのに、総額約19億円（96,049頭×20,000円）の費用を要したこと意味する。

ヒトの健康への影響

アライグマは様々な人獣共通感染症病原体を保有しており、伝搬した場合、深刻な健康被害をもたらす可能性がある。病原体は直接接触または間接接触（ダニなどの中間宿主を介した伝播）によってヒトに伝播する。表2Bは、アライグマがヒトに直接感染させるか、ダニなどの中間宿主を介した間接感染によって伝播する主要な感染症を示す。

表2B アライグマが媒介する可能性のある主要な感染症

感染経路	感染症名	主な症状
直接伝播	狂犬病	発熱、頭痛、倦怠感、筋肉痛、錯乱、幻覚、発汗、恐水病、呼吸困難といった症状を経て死に至る場合がほとんど
	トキソプラズマ症	無症状、妊婦の場合は流産、免疫不全状態では脳炎など
	エキノコックス症	初期は無症状、進行期は腹痛、疲労感、発熱など、末期には呼吸障害、意識障害
	サルモネラ感染症	発熱、腹痛、嘔吐、下痢、頭痛
	カンピロバクター感染症	腹痛、発熱、下痢、嘔吐、頭痛、悪寒、倦怠感
	エルシニア感染症	発熱、腹痛、嘔吐、下痢、頭痛
	アライグマ回虫幼虫移行症	発熱、精神神経症状、視力障害、脳炎、最悪の場合死に至る
	重症急性呼吸器症候群（SARS）	発熱、咳、悪寒、呼吸困難など
	皮膚糸状菌症	脱毛、発疹、かゆみ、膿瘍など
	疥癬	強いかゆみ、発疹
間接伝播	日本紅斑熱	発熱、頭痛、倦怠感
	ツツガムシ病	高熱、頭痛、発疹、倦怠感
	重症熱性血小板減少症候群（SFTS）	発熱、腹痛、嘔吐、下痢、頭痛、重症化すると意識障害なども
	日本脳炎	高熱、頭痛、吐き気、けいれん、麻痺、最悪の場合死に至る
	レプトスピラ症	発熱、頭痛、筋肉痛、悪寒、吐き気など、重症化すると黄疸、腎不全や心不全など
	E型肝炎	発熱、倦怠感、食欲不振、嘔吐、腹痛、重症化すると黄疸、肝腫大など
	カンピロバクター菌食中毒	下痢、腹痛、発熱、吐き気、頭痛、倦怠感など
	エルシニア菌食中毒	下痢、腹痛、発熱、吐き気、頭痛、倦怠感など

本表は、東京都環境局ウェブサイトの情報を基に作成（東京都環境局、2023）。

日本の野生アライグマにおける狂犬病（狂犬病ウイルスまたは*Baylisascaris procyonis*）の検出例は報告されていないが、他の国々ではこの致死的な病気の深刻な事例が報告されている（例：米国では狂犬病に感染したアライグマによる人の死亡事例があり、2023年に記録された動物の狂犬病3,760症例のうち1,085症例がアライグマであった（Boutelle et al., 2025））。これは本種が公衆衛生に深刻な影響をもたらす潜在的なリスクを抱えていることを示している。

文化遺産・文化財への被害

歴史的建造物や工芸品への被害に関する包括的な研究はごく限られている。しかし、全国489の登録文化財を有する神社・寺院を調査した報告書によると、489件中113件（23.1%）でアライグマによる財産被害が確認された。報告された主な被害には、糞による損傷、棲みつきによる被害、柱や壁の損傷、庭園荒らしなどが含まれる（米島 et al., 2018）。

また、アライグマは一般住宅にも侵入し、屋根裏や床下を住処として利用することもあり、構造物に甚大な損傷を与えることがある、この損傷の修復と再侵入防止対策には数十万円以上の費用がかかることがある（大庭, 2021）。

グリーンアノール

グリーンアノール *Anolis carolinensis* は米国南部原産の種であるが、世界10カ国・島嶼で導入が記録されている（GBIF, 2023a）。亜熱帯及び熱帯地域の森林や低木地帯でよく見られる小型から中型の樹上性昼行性トカゲであり、日本では熱帯気候で知られ様々な規模の島で構成される小笠原諸島と沖縄諸島の一部で定着している。

日本における野生での最初の確認は、1966年に小笠原諸島の父島とされ、グアム島から到着した輸送コンテナに紛れ込んだことによる非意図的な導入と、島内のペット飼育者によって野外に放たれたことや逸走という、2つの異なる経路から導入された可能性があるとされている。島にはグリーンアノールの天敵がほとんどいなかったため、1970年代から1980年代にかけて、この種は着実に生息域を拡大したと考えられている。その後数十年の間に、意図的あるいは非意図的に近隣の島々へ持ち込まれた結果、小笠原諸島の他の2つの島（母島と兄島）にも分布が拡大したとされる（鈴木, 2000）。

野生におけるグリーンアノールの個体数は島によって大きく異なると思われるが、個体群密度は数百～数千頭/ヘクタール程度と推定され、小笠原諸島全体では数百万頭が野生に生息しているとされている（戸田 et al., 2009）。

日本政府は本種を地域から根絶すべく組織的な取り組みを行なって、2014年から2022年にかけて約12億円が対策費として計上され（JUDGIT, 2025）、現在も個体数削減に向けた努力が継続中である。

生態系への影響

小笠原諸島全域と沖縄諸島の一部は、固有種を数多く擁する独自の生態系が評価され、それぞれ2011年と2021年に世界自然遺産に登録された。グリーンアノールの導入がこの唯一無二の在来生態系に与える影響が最も懸念される。

在来種の捕食

小笠原諸島の昆虫の約28%（約379種）が固有種と推定されており（環境省関東地方環境事務所, 2021）、その一部はグリーンアノールの捕食により絶滅寸前に追い込まれていることが知られている。グリーンアノールの捕食対象となる種はすべて昼行性で、小型から中型であり、毒などの防御機能を持たない。

最も顕著な例が、「環境省レッドリスト」ではCR（絶滅危惧種）に指定されているオガサワラシジミ *Celastrina ogasawaraensis*である。1980年以前には父島で頻繁に観察されていたが（高桑 & 須田, 2004）、2020年以降野生個体は確認されておらず、継続的な繁殖プロジェクトも成功していないため、ほぼ絶滅したと考えられている。オガサワラシジミは、雌が産卵中や雄が森林縁辺部の樹上で占有行動を示す際に、グリーンアノールに容易に捕食され、高い捕食圧にさらされていたと考えられている（苅部, 2005; 高桑 & 須田, 2004）。

また、トンボ固有種5種のうち4種である、オガサワラアオイトトンボ *Indolestes boninensis*、オガサワラトンボ *Hemicordulia ogasawarensis*、オガサワライトトンボ *Ischnura ezoin*、シマアカネ *Boninthemis insularis*にも顕著な捕食圧がかかっている（苅部, 2009）。環境省レッドリストでは、前者2種は絶滅危惧種CR、後者2種は絶滅危惧種VUに分類されている。枝先にとまっている間に捕食されたと言われ、これらの種は属島にわずか数百個体しか残っていないと推定され、世界で最も絶滅の危機に瀕しているトンボとなっている。

グリーンアノールによって絶滅寸前に追い込まれた種に加え、在来のハチ類、クワガタムシ科、コガネムシ科、オガサワラゾウノミムシ属など多くの種が、グリーンアノールの拡散後に消滅または個体数を激減させたとされる（槇原 et al., 2004; 高橋 et al., 2014）。

他種との競合

また、在来種であるオガサワラトカゲ *Cryptoblepharus nigropunctatus*との間で餌の競合が生じている可能性も知られており、その幼体はグリーンアノールに捕食されるとも言われている（戸田 et al., 2009）。

小笠原諸島ほど深刻ではないものの、グリーンアノールが定着した沖縄の一部地域では、アオカナヘビ *Takydromus smaragdinus* やオキナワキノボリトカゲ *Japalura polygonata* がグリーンアノールと競合関係にあることが報告されている（沖縄県, 2025）。

間接的影響

グリーンアノールが固有種に直接与える影響に加え、彼らは在来環境に対して間接的な脅威も及ぼしている。その一例として、小笠原諸島では受粉者として重要な役割を担う固有ミツバチ（ハチ上科内の単系統群Anthophila）を捕食することで植物生態系を崩壊させ、在来植物種の受粉成功率低下という連鎖的影響を引き起こしている（安部, 2009）。

固有のミツバチは、グリーンアノールが生息域を広げ始める前の1970年代にはよく見られた。しかし、1980年代以降、父島と母島では固有のミツバチ種の数が著しく減少しており、9種の固有種のうち5種は近隣の島々でも観察が難くなっている。固有種ミツバチの個体数減少により、セイヨウミツバチ *Apis mellifera* の割合が増大し、島全体の受粉パターンが変化する可能性がある（安部,

2009)。セイヨウミツバチは在来植物より外来植物を好む傾向があるという研究結果もあり、植物景観が長期的にどのように変化するかと懸念されている。

コラム：米国の事例—世界遺産エバーグレーズを侵略するバーミーズパイソン

外来種は過去60年間で米国に少なくとも1兆2200億米ドル（1米ドル145円として、176.9兆円相当）の経済損失をもたらしたと推定されている（Fantle-Lepczyk et al., 2022）。フロリダ州は亜熱帯気候、長い生育期、凍結がほとんどないため、外来種が生存しやすく、時には繁栄する理想的な条件を備えており、特に外来種に脆弱な地域となっている。フロリダで繁殖集団を形成した多くの外来種の中でも、バーミーズパイソン（ビルマニシキヘビ）*Python bivittatus*は悪影響の規模において突出している。

バーミーズパイソンは、インド北東部、中国南部、東南アジア、マレー半島原産のヘビである。米国では1979年にフロリダのエバーグレーズで初めて確認され、さまざまな生息地への適応力と幅広い食性により、急速に繁殖集団を形成し、2000年までにIASとなった（Campbell & Freedman, 2022; Guzy et al., 2023）。

専門家の多くは、その導入はペットの放出によるものと考えており（Willson et al., 2011）、バーミーズパイソンはペット目的で米国に一般的に輸入されている。

さらに、エキゾチックペットの人気が高まる中、オンラインで生体販売が増加しており、人々は動物の適切な飼育方法、成長サイズ、寿命を知らないままペットを入手てしまっている。その結果、エキゾチックペットが逃げ出したり放逐されたりするリスクが高まっている（Lockwood et al., 2019）。

フロリダでは天敵がない、非常に繁殖力の高い種であるため、控えめな推定でも数万頭のバーミーズパイソンがエバーグレーズに生息していると考えられている。導入から50年足らずであるにもかかわらず、その影響は、生態系や経済など広範囲に及んでいる（USGS, 2025b）。バーミーズパイソンは、アメリカワニ*Alligator mississippiensis*、オオアオサギ*Ardea herodias*、絶滅危惧種のコウノトリ*Mycteria americana*から、イエミソサザイ*Tglodytes aedon*、トガリネズミ、固有種であるげっ歯目の絶滅危惧種フロリダキネズミ（キーラルゴウッドラット）*Neotoma floridana smalli*まで、幅広い在来種を捕食する（Guzy et al., 2023）。2012年の



© Matthew Metcalf (USGS)

調査では、アカオオヤマネコ（ボブキャット）*Lynx rufus*の個体数が87.5%減少し、アライグマやキタオポッサム*Didelphis virginiana*は約99%減少、ヒメヌマチウサギ（マーシュラビット）*Sylvilagus palustris*、トウブワタオウサギ*Sylvilagus floridanus*、ハイイロキツネ*Urocyon cinereoargenteus*及びアカギツネ*Vulpes vulpes*はエバーグレーズの一部地域から姿を消した。これらはバーミーズパイソンの導入と一致している（USGS, 2025a）。さらに、在来種との直接的な捕食や競合によって地域生態系の健全な機能が損なわれるだけでなく、バーミーズパイソンは病原体や寄生虫の拡散にも関与している。彼らは新しい肺寄生虫*Raillietiella orientalis*を地域に持ち込み、在来のヘビに感染させているが、その影響は未知数である（Miller et al., 2017）。また、バーミーズパイソンによる哺乳類の多様性低下は、蚊が媒介する人獣共通感染症であるエバーグレーズウイルス感染を増加させ、人への感染リスクを高めることが確認されている（Burkett-Cadena et al., 2021）。

2022年以降、フロリダ州魚類野生生物保護委員会には、エバーグレーズから侵入したバーミーズパイソンを除去するために年間300万米ドル（約4億3,500万円）が割り当てられている。これは2020～2021年度に割り当てられた100万米ドルからの増額であり（Florida Office of the Governor, 2020）、バーミーズパイソンに捕食された絶滅危惧種の研究や回復に費やされた数億ドルは含まれていない（USFWS, 2012）。

2012年、バーミーズパイソンは米国魚類野生生物局によってレイシー法の「有害野生生物」リストに追加され、許可なしでの輸入や州間輸送が禁止された。さらに2021年以降、フロリダ州では飼育が禁止されている（Velasco et al., 2022）。

ヘビの管理には、視覚的・生物学的調査、追跡、捕獲など、さまざまな手法があるが、それぞれ個体数の制御における成功率は異なる。複数の管理手法を組み合わせることで、小規模な地域では個体数を減らすことが可能であるが、バーミーズパイソンの検出率が低く、エバーグレーズの広大でアクセス困難な地形のため、管理の拡大は困難である。

バーミーズパイソンをフロリダのエバーグレーズから完全に根絶することはほぼ不可能と言えるが、遺伝子バイオコントロールのような長期的な解決策に関するさらなる研究が必要である。ただし、これらにはバーミーズパイソン以外の種への波及などの固有のリスクを伴うことを忘れてはならない（Guzy et al., 2023）。

侵入個体群の管理に加え、不要になったペットを遺棄しないよう、別の選択肢について飼育者を教育し、さらなるバーミーズパイソンやその他の外来種の放出を防ぐために既存の規制を徹底することも同様に重要となる。

（WWFアメリカ サラ・グランジ著）

第3章 今後リスク評価が必要な種の特定

前章で取り上げた事例から明らかなように、IASの根絶は種の拡散に伴い困難さを増すだけでなく、生息域内の様々な利害関係者に経済的・環境的・社会的な巨額の負担を継続的に強いことになる。

ペット利用に起因するIASによる悪影響を最小限に抑えるためには、ペット市場で取引される種のうち、外来種となる可能性が高い種を特定することが不可欠である。

本章では、オンラインで入手可能ないくつかの外来種関連データセットを用いて、日本のペット市場で取引されている種が他国で外来種として記録されているか、影響を与えたことが知られているか、そして日本で外来種となるリスクがあるかを検証した。他国で外来種となっているという事実のみで日本で外来種となる可能性が高いとは言えないが、本来の生息地以外の環境で定着している以上、それら種は一定程度の競争力、適応能力や繁殖能力を有していると考えられる。また、国際的なペット市場において取引される種に占める外来種の割合が高い（Gippet & Bertelsmeier, 2021）こともふまると、日本で取引されている種が各国で外来種化しているか確認することは、リスクの高い種を見極め、予防策を検討するうえで意味があると考える。

しかし、これは外来種の研究に関わる専門家や政策立案者が将来の研究を設計し、包括的な評価や政策イニシアチブを行なうための予備調査であり、取引種のリスク評価ではないことを強調したい。

方法

日本のペット市場で取引されている種が外来種として認識されているかどうかを確認するために、以下のデータセットを使用した。

市場データ

家畜化された動物²を除いた対象分類群（哺乳綱、鳥綱、爬虫綱）の種（種または亜種レベルで特定され、販売個体数が10以上と記録されているもの）³を以下2つのWWFジャパンが実施もしくは委託した調査から抽出した。

² モルモット、ウサギ、フェレット、ニワトリ等

³ 種名は販売されていた種名で記録したため、本来の種ではない種が含まれている可能性がある。

爬虫類取引フェア

2025年10月18・19日に東京ビッグサイトで開催された日本の主要爬虫類フェアにおける現地スポット調査。80以上のペットショップやブリーダーが集まり、多様な分類群に属するエキゾチックアニマルの即売会イベントである。

ショッピングモール内のペットショップ

2025年5月から9月にかけて、複数の大型ショッピングモール内にある13のペットショップ／カフェで実施された現地スポット調査。

外来種データセット

種の侵入性及び他国・地域における導入状況

○ 導入・外来種グローバル登録簿（GRIIS）の総覧

GRIISは、導入された種及びIASについて、国レベルおよび地域レベルで検証・確認されたチェックリストをまとめたデータセットであり、190カ国以上から提供されている。これらのデータは、GRIIS の公式ウェブサイト (<https://griis.org/dataset/search>) 及びグローバル生物多様性情報機構 (GBIF) のウェブサイト (<https://www.gbif.org/>) で公開されている。本総覧は、報告国、種の生息状況、侵入性ステータスなどのフィールドを含む196のGRIIS国別チェックリストを集約したもので、貴重なチェックリストのアクセス性と相互運用性を促進するために公開されたものである (Pagad, Bisset, Genovesi, et al., 2022)。

本調査用にダウンロードしたデータセットのバージョンは「V1_0.csv」である (Pagad, Bisset, & McGeoch, 2022)。

外来種の影響に関するデータ

○ EICAT（環境に対する影響）

EICATは、主にIUCNのISSG（外来種専門家グループ）によって開発・維持され、IUCNのグローバル外来種データベース(GISD: <https://www.iucngisd.org/gisd/>)で公開されているデータに基づき、外来種が環境に与える影響に基づいて異なる影響カテゴリに分類している。

2025年12月に、Massive (MV)、Major (MR)、Moderate (MO)、Minor (MN) の影響を持つと分類された対象分類群の種をウェブサイトから抽出した。

○ InvaCost（経済に対する影響）

InvaCostは、世界中のIASに関する経済的コスト記録について、最新かつ包括的、標準化されたデータ集積及び記述を提供するデータベースである (<https://invacost.fr/en/accueil/>)。パリ・サクレ大学研究グループによって開発され、14言語で数千の情報源から抽出された13,000件以上のコスト関連記録を含み、外来種の経済的影響を記述・比較・分析することを目的としている。

本調査用にダウンロードしたデータセットのバージョンは「InvaCost_database_V4.1.xls」(Diagne et al., 2020) である。

○ GIDIAS（自然と人への影響）

GIDIASは、6,700以上の公開文献から収集した3,353種のIASと、それらが自然、自然の恩恵、人々の生活の質に与える影響に関するグローバルデータセットである (Bacher et al., 2025)。本データは、生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム (IPBES) の概念的枠組みを採用し、自然と人間の相互作用という視点からIASの影響を記述・分析している。

本調査用にダウンロードしたデータセットのバージョンは「GIDIAS_20250417_Excel.xlsx」である (Bacher et al., 2025)。

日本において外来種となる可能性

○ CABI Horizon Scanning Tool (CABI HST)

CABI HSTは、「リスク地域」に他の生息域から特定の種が侵入する可能性のある「外来種候補リスト」を特定する意思決定支援ツールである (<https://www.cabi.org/HorizonScanningTool>)。CABI

Compendiumデータシート (<https://www.cabidigitallibrary.org/journal/cabiccompendium/about>) を用いて、例えば、その種が近隣地域に生息しているか、貿易で結びついているか、あるいは類似の気候を共有しているかなどに基づいて、外来種となる可能性のある種をリストアップしている。

種のリストは、2026年1月9日にウェブサイトから「リスク地域」を日本に設定し、分類群を脊椎動物に絞ってダウンロードした。

データの限界

本調査では、対象とする動物の範囲を3つの分類群（哺乳綱、鳥綱、爬虫綱）のみに限定した。しかしながら、日本では他の分類群に属する様々な外来種が取引されている（例：両生類、Kitade & Wakao, 2022）。さらに、対象分類群間で市場調査により記録された個体数には大きな開きが見られた。加えて、本調査で使用した取引市場データは長期モニタリング調査ではなくスポット調査から収集されたものであり、日本のペット市場でより大量に取引され、外来種になる可能性の評価がより急務である種が除外されている可能性がある。

本調査で用いた上記5つの国際的な外来種データセットは、専門家や政府関係者が登録・収集した情報であり比較的信頼性が高いが、包括的なデータセットが公開されるまでには通常時間をするため、最新の導入傾向といったデータは反映されていないと考えられる。また、外来種に関する研究の進歩度合いの差により、特定の分類群にデータが偏る可能性もある。

結果

2つの国内スポット市場調査の対象分類群の記録を抽出・統合したところ、148種の種または亜種、合計4,969個体の販売記録が対象として抽出された。

The Global Register of Introduced and Invasive Species (GRIIS) —侵略性の記録

対象分類群について、GRIISデータセットを「生息状況 (occurrenceStatus) : 'PRESENT'」、「定着手段 (establishmentMeans) : 'ALIEN'」、「侵略性 (isInvasive) : 'INVASIVE'」でフィルタリングした結果、251の種が特定された。市場調査から特定された148種中、21種がこの251種に含まれており、16の国・地域で外来種として記録されていた（表3A）。

表3A：日本のペット市場で販売されている種を、自国に導入された外来種として記録している国々

分類群	一般名	学名	市場調査における販売頭数	外来種化を報告している国
鳥類	コザクラインコ	<i>Agapornis roseicollis</i>	16	イスラエル
	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	11	チリ、イスラエル、イタリア、メキシコ、スペイン、英国

爬虫類	ボールパイソン	<i>Python regius</i>	299	メキシコ
	カーペットパイソン	<i>Morelia spilota</i>	116	メキシコ
	コーンスネーク	<i>Pantherophis guttatus</i>	104	バハマ
	ヒョウモントカゲモドキ	<i>Eublepharis macularius</i>	90	メキシコ
	トッケイイヤモリ	<i>Gekko gecko</i>	85	メキシコ、米国
	グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	80	ミクロネシア、フィジー、インドネシア、米国
	レインボーボア	<i>Epicrates cenchria</i>	50	メキシコ
	エボシカメレオン	<i>Chamaeleo calyptratus</i>	44	メキシコ
	フロリダアカハラガメ	<i>Pseudemys nelsoni</i>	39	メキシコ
	ミズオオトカゲ	<i>Varanus salvator</i>	34	メキシコ
	グリーンツリーパイソン	<i>Morelia viridis</i>	33	メキシコ
	サバンナモニター	<i>Varanus exanthematicus</i>	29	メキシコ
	マダガスカルヒルヤモリ	<i>Phelsuma grandis</i>	27	モーリシャス
	ナイルモニター	<i>Varanus niloticus</i>	22	メキシコ、米国
	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	20	ラトビア、タイ
	ブラックアンドホワイトテグー	<i>Salvator merianae</i>	16	ブラジル
	アムールラットスネーク	<i>Elaphe schrenckii</i>	11	スウェーデン
	インドシナウォータードラゴン	<i>Physignathus cocincinus</i>	11	メキシコ
	ツナギトゲオイグアナ	<i>Ctenosaura similis</i>	10	米国

The IUCN Environmental Impact Classification of Alien Taxa (EICAT) —環境、人の生活への影響

EICATのデータセットを対象分類群でフィルタリングした結果⁴、72種の種が抽出され、そのうち1種、オキナインコ*Myiopsitta monachus*が市場調査でも記録されていた。

オキナインコは、他の種との餌や生息地をめぐる競争、他の種の捕食、在来種への病気の伝播を通じて環境に影響を与えると記録されている。

⁴ データセットには対象分類群のうち、鳥類のみが記録されていたため、哺乳類と爬虫類に関しては検証がなされなかった。

InvaCost: The Cost of Invasive Species—経済への影響

InvaCostのデータセットを対象分類群でフィルタリングし、日本からの記録を除外した結果⁵、157の種が抽出された。このうち、オキナインコ、ヨツユビハリネズミ*Atelerix albiventris*、グリーンイグアナ*Iguana iguana*、カリフォルニアキングスネーク*Lampropeltis californiae*、及びブラックアンドホワイトテグー⁶*Salvator merianae*の5種が市場調査でも記録されていた。これらの種によって生じた推定総経済コストが6カ国から報告されており、合計約11億円（6,960,831米ドル）であった⁶（表3B）。そのうち、オキナインコは約10億円（6,048,193米ドル）と最も経済的影響が大きかった。

⁵ このセクションの目的は、他国における外来種の影響を明らかにすることであるため、日本から報告された記録は除外した。他のデータセットも同様の理由で日本からの記録を除外している。

⁶ 「Cost_estimate_per_year_2017_USD_PPP」の列を費用の合計を求めるうえで利用した。

表3B 日本のペット市場で取引される、他国における外来種と当該種による被害額

分類群	一般名	学名	報告国	被害額（米ドル）
鳥類	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	メキシコ	53,420
			スペイン	383,254
			英國	60,824
			米国	5,550,695
哺乳類	ヨツユビハリネズミ	<i>Atelerix albiventris</i>	スペイン	2,357
爬虫類	ブラックアンドホワイト テグー	<i>Salvator merianae</i>	ブラジル 米国	5,682 8,641
	カリフォルニア キングスネーク	<i>Lampropeltis californiae</i>	スペイン	848,031
	グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	フランス 米国	47,472 455
総額				\$ 6,960,831

Global Impacts Dataset of Invasive Alien Species (GIDIAS) —自然、自然の恵み、良質な人の生活への影響

GIDIASのデータセットを対象分類群でフィルタリングし⁷、日本での記録を除外した結果、232種の種が抽出された。そのうち3種、セキセイインコ*Melopsittacus undulatus*、オキナインコ、チンチラ*Chinchilla lanigera*が市場調査でも記録されていた。ただし、チンチラについては、影響に関する記録は見つからなかった。

セキセイインコとオキナインコは、地域内の他の鳥類との競合を引き起こすことで現地の生態系に悪影響を与えたと記録されている他、オキナインコはさらに、変電所や支持構造物に巣を作ることで、電力供給に悪影響を与えたと記録されている。

⁷ データセットには対象分類群のうち、鳥類と哺乳類のみが記録されていたため、爬虫類に関しては検証がなされなかった。

英国非営利団体CABI提供のHorizon Scanning Tool (CABI HST) —日本において外来種となる可能性

CABI HSTデータセットを対象分類群でフィルタリングした結果、153種の種が抽出され、そのうち6種である、ボールパイソン*Python regius*、コーンスネーク*Pantherophis guttatus*、カリフォルニアキングスネーク、ジャクソンカメレオン*Trioceros jacksonii*、ナイルモニター*Varanus niloticus*、及びツナギトゲオイグアナ*Ctenosaura similis*が市場調査でも記録されていた。

結果のまとめ

市場調査で記録された148種のうち、26種（17.6%）が本調査で使用した1つ以上の外来種に関するデータセットで確認された。最も多くのデータセットに記録された種はオキナインコで、4つのデータセットに記録されており、次いでボールパイソン等7種が2つのデータセット、残りの18種は1つのデータセットにのみ記録されていた（表3C）。

なお、今回確認された26種のうち、グリーンイグアナ及びニホンスッポンは日本の「生態系被害防止外来種リスト」の中すでに重点対策外来種として位置づけられており、法的に取り扱いが規制されているわけではないが、甚大な被害が予想されるため対策の必要性が高いと位置づけられてい

る。ヒョウモントカゲモドキにおいても同リストで侵入の記録があるが定着は確認されていない「その他の定着予防外来種」と位置づけられている。また、オキナインコとセキセイインコは日本国内の一部で定着や繁殖の記録が過去に確認されている。さらに、市場で販売されているヨツユビハリネズミとは異なるが、*Erinaceus*分類群に属すハリネズミ各種は特定外来生物に指定されている。

表3C 日本のペット市場で取引され、外来種関連データセットに記録されていた種

分類群	一般名	学名	種が確認されたデータセット
鳥類	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	GRIIS, EICA, InvaCost, GIDIAS
	セキセイインコ	<i>Melopsittacus undulatus</i>	GIDIAS
	コザクラインコ	<i>Agapornis roseicollis</i>	GRIIS
哺乳類	チンチラ	<i>Chinchilla lanigera</i>	GIDIAS
	ヨツユビハリネズミ	<i>Atelerix albiventris</i>	InvaCost
爬虫類	ボールパイソン	<i>Python regius</i>	GRIIS, CABI HST
	コーンスネーク	<i>Pantherophis guttatus</i>	GRIIS, CABI HST
	グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	GRIIS, InvaCost
	カーペットパイソン	<i>Morelia spilota</i>	GRIIS
	ヒョウモントカゲモドキ	<i>Eublepharis macularius</i>	GRIIS
	トッケイイヤモリ	<i>Gekko gecko</i>	GRIIS
	カリフォルニア キングスネーク	<i>Lampropeltis californiae</i>	InvaCost, CABI HST
	レインボーボア	<i>Epicrates cenchria</i>	GRIIS
	ナイルモニター	<i>Varanus niloticus</i>	GRIIS, CABI HST
	エボシカメレオン	<i>Chamaeleo calyptratus</i>	GRIIS
	フロリダアカハラガメ	<i>Pseudemys nelsoni</i>	GRIIS
	サルバトルモニター	<i>Varanus salvator</i>	GRIIS
	グリーンツリーパイソン	<i>Morelia viridis</i>	GRIIS
	ブラックアンドホワイトテグー	<i>Salvator merianae</i>	GRIIS, InvaCost
	サバンナモニター	<i>Varanus exanthematicus</i>	GRIIS
	マダガスカルヒルヤモリ	<i>Phelsuma grandis</i>	GRIIS
	ジャクソンカメレオン	<i>Trioceros jacksonii</i>	CABI HST
	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	GRIIS
	ツナギトゲオイグアナ	<i>Ctenosaura similis</i>	GRIIS, CABI HST
	アムールラットスネーク	<i>Elaphe schrenckii</i>	GRIIS
	インドシナ ウォータードラゴン	<i>Physignathus cocincinus</i>	GRIIS

解釈と考察

GRIISに記録され、日本の市場でも売られていた種を外来種として報告していた国々は、必ずしも日本と同じ気候区に属している国ではなかった。しかし日本は（他の報告国もそうであるように）多様な気候・地理的特徴を有する国であるため、他国で外来種と特定された種の一部にとって好適な条件を提供しうる。特定された種の原産地分布、生息環境、捕食パターン、繁殖力や輸入量について詳細な検討を行なうことが、少なくとも日本国内での定着可能性を確率論的に把握するために必要である。

外来種による影響を記録したデータセットは分類群の網羅性に偏りがあり、特にEICATとGIDIASの2つのデータセットでは1つまたは2つの対象分類群のデータが完全に欠落していたため、ある種や分類群のもたらす特徴的な影響について確定的な結論を出すことは困難である（影響が真に特徴的なのかどうか比較できずわからない、また影響が小さいのか情報がないのか判断できないため）。一方で、InvaCostを使用して複数の外来種が他国の経済に重大な悪影響を及ぼしたと示したことは、政府のみならず事業者などすべての関係者が外来種問題の効果的な対策を主体的に進めない限り、将来に社会経済にも相当な被害が及ぶことをイメージする手助けとなるため、価値のある例示となる。実際の潜在リスクを特定するには、広範な文献調査と専門家への聞き取り、当該種が影響を受ける地域の生態系、経済、人々の社会生活にどのような変化をもたらすかを正確に把握する必要がある。

日本のペット市場で一般的に取引されている種のうち、外来種関連データベースの少なくとも1つに記録があった種数は多くなかった（148種中26種：17.6%）。しかし、種が特定の管轄区域で導入または定着したと公式に記録されるまでには時間がかかり、定着の影響を評価するにはさらに長い観察期間が必要なことを考慮すると、ペット市場で取引される種が外来種になる可能性が低く、影響も少ないと結論づけるのは時期尚早である。また、野生での種同定が困難であることや、他の代表的な外来種に比べて注目度が低いことを理由に、取引される多くの種がまだ調査・記録されていない可能性もある。また、日本において既に外来種としてリスクがあると認識されている種（例：グリーンイグアナ、ヒヨウモントカゲモドキ）が市場で多く販売されていたことも懸念される。既に野生化が確認されている種は、これ以上拡散しないよう対策を行ない、まだ野生では確認されていない種は、野外放出が起こらないよう予防策を徹底するとともにどちらにおいてもモニタリング体制を強化することが不可欠である。

5つの異なるデータセットの中で、どの種が日本で実際に外来種となる可能性があるかを直接示唆しているため、最も有用なデータセットはCABI HSTからダウンロードした種のリストであると言えるかもしれない。その中には、ボールパイソンとコーンスネークが含まれており、これらは本報告書で使用した市場データとGRIISに記録されているだけでなく、過去の日本市場調査（若尾 et al., 2018）でも多数（それぞれ300頭以上）販売が確認されている。また、ボールパイソン、コーンスネーク、カリфорニアキングスネーク、ナイルモニターは、過去に日本の屋外で発見されたとの報道がある（FNNプライムオンライン, 2023; とちテレニュース, 2023; 井上, 2016; 雨宮, 2022）。これらは、ペットとして飼育されていた個体の逸走または飼育者による意図的な遺棄によるものと考えられ、今後これらの種が放出され、野生化することのないよう細心の注意を払う必要がある。これらの中には定着の潜在リスクが高い広域分布種や遺棄のリスクが高い長寿命な種（Maceda-Veiga et al., 2019）が含まれていることも認識すべきである。

CABI HSTから特定された種、特に取引個体数の多い種（例：ボールパイソン、コーンスネーク）

について詳細なリスク評価を行なうことは、将来のリスクを排除するための積極的な対策の出発点として有益だろう。

結論

本調査はペットとして飼育される種が、過去及び将来において人間社会と自然環境に重大な影響を及ぼした、また、及ぼし得ることを具体的なデータを基に明らかにした。

第1章では、日本で特定外来生物に指定されている種及び外来種と認識されている哺乳網・鳥網・爬虫網に属する動物が過去（及び現在）にペットとして広く利用され、飼育者による意図的及び非意図的な飼育個体の野外放出行為の積み重ねによって、外来種化した可能性が高いことが明らかになった。また、こうした外来種が他の動物や人へ感染症を広げる恐れがあることも示した。

ペットとして外来種になる可能性のある動物を販売、輸送、飼育する事業者や個人に対し、意図的・非意図的な野外への放出による悪影響の可能性を周知し、こうした事態を未然に防ぐ予防的措置を講じることが重要である (IPBES, 2023)。実際、環境省は自然関連財務情報開示タスクフォース (TNFD) のガイダンスを利用して、外来種を扱う事業者に対し情報公開を推奨している（環境省 et al., 2025）。IASを生みだすリスクを高める行為によって利益を得ている事業者には、自身の事業の自然への負荷を明らかにして、それを最小化する義務があるのは当然であり、その点ではTNDFの活用は意味がある。しかし、このような任意の取り組みだけでは、決して十分とは言えない。

外来種化した動物は、ペットや展示利用という飼育個体の野外放逐に由来する可能性が高いという本調査の結果とこれまでの国際的な複数の研究結果の整合が示された。世界的なエキゾチックペット取引が多数の脊椎動物のIAS化に寄与してきたことを示したLockwood et al.の総説は、取引→飼育→放逐（逸走、遺棄）という一連の人為プロセスが外来種化リスクを高めることを示している (Lockwood et al. 2019)。さらに、Gippet & Bertelsmeier (2021) は、IASになりやすい特性を持つ種（環境適応への柔軟性が高い広域分布種）ほど国際的なペット市場で大量に流通することを定量的に示し、ペット取引そのものが高リスク種を選好しやすい構造を有していることを明らかにした。これらの知見を踏まえると、日本における外来種化も、哺乳網と鳥網、爬虫網で当初の主な導入目的は展示とペットで異なるものの、いずれも「飼育を起点とする人為的導入」という共通基盤の上で発生している。したがって、IAS発生の抑止には、事業者による飼育と家庭における飼育という経路別の対策に加え、そもそも流通段階におけるリスク種の流入抑制や、飼育者の行動に働きかける仕組みの強化が重要であると考えられる。具体的には、既存の未判定外来生物の輸入時の取り扱いにおいて、輸入しようとする者の責務を強化することや対象となる未判定種の拡大なども検討すべきであろう。

第2章では、日本で最も悪名高いと言えるアライグマ及びグリーンアノールという2種のペット由來のIAS（いずれも特定外来生物）がもたらした負の影響を再検証し、外来種が環境・経済・公衆衛生に及ぼした深刻な悪影響を提示した。米国の事例も同様にペットの安易な遺棄が在来生態系に取り返しのつかない影響をもたらし、経済的にも社会の大きな負担になっていることを示した。

外来種による悪影響を軽減するには、その場しのぎの一時的対策に頼るのではなく、最も費用対効果の高い対策を構想することが重要である（亘, 2011）。そして、その最も費用対効果が高いのは、予防、次いで早期介入である (Venette et al., 2021)。リスク評価と導入経路の分析を行ない、適切な規制導入に優先して取り組み、そして、監視を強化することである。ニュース記事、ソーシャルメディア、科学文献や、グレー文献などの公開情報をを利用して知識を蓄積することも、野生における非

在来種の確認状況を可能な限り早期に検知するのに役立つ可能性がある。

第3章では、日本の現在のペット市場で販売されていた種が他国で外来種として記録されているかどうかを様々な観点（環境負荷、経済的負荷、人の生態系サービス利用やウェルビーイングなど）で既存の国際的なデータベースと照会し、潜在的なリスクのある種を明らかにした。

データと結果には限界があるものの、本調査は、外来種とペット市場で取引されている種との密接な関連性を強く示唆し、将来より詳細に評価すべき種を明らかにした。

今後の研究と対策に向けて

外来生物化リスクが高い種を具体的に特定するには、モニタリングを通じて記録された、価格や個体の大きさといった情報を含む、より包括的な分類群の国内外の取引データを活用することが重要である。価格や取引量は飼育者による野生への放出量を左右し、特定の種が外来種となる可能性を高めるため (Gippet & Bertelsmeier, 2021)、多様な情報源（例：COMTRADE、CITES Trade Database）を利用して輸入データを分析したり、事業者の協力を得たりして、ペットとして大量に輸入されている種、国内で流通している種やその規模を明確にしていくことも必要である (Stringham & Lockwood, 2018)。

有用な政策イニシアチブを形成し、これ以上IASが増えるのを防ぐための実質的な措置を講じるには、本調査で特定された種のような潜在的高リスク種に対する包括的なリスク評価が不可欠である。外来種の導入と定着には多面的な要因が関与するため、種の包括的な侵入リスク評価は困難で時間も要する。しかし、リスク評価を容易にするために開発された多くのツールやデータベースが存在し、利用可能である。例えば、Roy et al. (2018) は、リスク評価を構築する際に満たすべき14の最低基準を示し、各国が利用している評価基準なども例示している。

外来生物法の目的である「生物の多様性の確保、人の生命及び身体の保護並びに農林水産業の健全な発展」を達成するためには、既に被害が認識されている種に対応するだけではまったく足りておらず、改めて予防の重要性をすべての関係者の共通認識とすることが必須である。国際的に評価されている外来種管理のための政策担当者向けの情報 (IPBES, 2023) や第3章で紹介したツールを積極活用し、予防的措置を講じる対象を特定するためのリスク評価をより効率的に行なえる体制を構築することが急務であろう。特に、気候変動による外来種問題の深刻化が懸念される中、将来のリスクを軽減し、人と自然の調和のとれた共生を実現するためには、政策立案者、専門家、研究機関、NGO・NPO、事業者、一般市民の協働が不可欠である。

参考文献

- Bacher, S., Ryan-Colton, E., Coiro, M., Cassey, P., Galil, B. S., Nuñez, M. A., Ansong, M., Dehnen-Schmutz, K., Fayvush, G., Fernandez, R. D., Hiremath, A. J., Ikegami, M., Martinou, A. F., McDermott, S. M., Preda, C., Vilà, M., Weyl, O. L. F., Aravind, N. A., Angelidou, I., … Zengeya, T. A. (2025). Global Impacts Dataset of Invasive Alien Species (GIDIAS). *Scientific Data*, 12(1), 832. <https://doi.org/10.1038/s41597-025-05184-5>
- Boutelle, C., Bonaparte, S., Orciari, L. A., Kirby, J. D., Chipman, R. B., Fehlner-Gardiner, C., Thang, C., Julien, D., Hirose, J. A. M., García, B. C., Wallace, R. M., & Blanton, J. D. (2025). Rabies surveillance in the United States during 2023. *Journal of the American Veterinary Medical Association*, 263(10), 1310–1317. <https://doi.org/10.2460/javma.25.05.0344>
- Burkett-Cadena, N. D., Blosser, E. M., Loggins, A. A., Valente, M. C., Long, M. T., Campbell, L. P., Reeves, L. E., Bargielowski, I., & McCleery, R. A. (2021). Invasive Burmese pythons alter host use and virus infection in the vector of a zoonotic virus. *Communications Biology*, 4(1), 804. <https://doi.org/10.1038/s42003-021-02347-z>
- Campbell, G. M., & Freedman, J. A. (2022, June 27). *Python bivittatus Kuhl*. USGS Nonindigenous Aquatic Species Database. <https://nas.er.usgs.gov/queries/FactSheet.aspx?speciesID=2552>
- Catford, J. A., Bode, M., & Tilman, D. (2018). Introduced species that overcome life history tradeoffs can cause native extinctions. *Nature Communications*, 9(1), 2131. <https://doi.org/10.1038/s41467-018-04491-3>
- CBD. (2022, December 7). *Decision 15/4. Kunming-Montreal Global Biodiversity Framework*. Conference of the Parties to the Convention on Biological Diversity. Fifteenth meeting, Montreal, Canada. <https://www.cbd.int/doc/decisions/cop-15/cop-15-dec-04-en.pdf>
- Diagne, C., Leroy, B., Gozlan, R. E., Vaissière, A.-C., Assailly, C., Nuninger, L., Roiz, D., Jourdain, F., Jarić, I., & Courchamp, F. (2020). InvaCost, a public database of the economic costs of biological invasions worldwide. *Scientific Data*, 7(1), 277. <https://doi.org/10.1038/s41597-020-00586-z>
- Fantle-Lepczyk, J. E., Haubrock, P. J., Kramer, A. M., Cuthbert, R. N., Turbelin, A. J., Crystal-Ornelas, R., Diagne, C., & Courchamp, F. (2022). Economic costs of biological invasions in the United States. *The Science of the Total Environment*, 806(Pt 3), 151318. <https://doi.org/10.1016/j.scitotenv.2021.151318>
- Florida Office of the Governor. (2020). *Florida Budget Highlights*. <https://www.flgov.com>
- FNNプライムオンライン (Director) . (2023, November 24). 「噛む力が強い」庭のウッドデッキに“オオトカゲ”！ 今も逃走中…安易に近寄るのは危険 神奈川・相模原市 [Broadcast]. In イット！ . Retrieved 2026年1月22日, from https://www.fnn.jp/articles/-/620439?display=full#goog_rewareded
- GBIF. (2023a). *Anolis carolinensis* Voigt, 1832 [Checklist dataset]. GBIF Backbone Taxonomy. <https://www.gbif.org/species/2466939>
- GBIF. (2023b). *Procyon lotor* (Linnaeus, 1758) [Checklist dataset]. GBIF Backbone Taxonomy. <https://doi.org/10.15468/39omei>
- Gippet, J. M. W., & Bertelsmeier, C. (2021). Invasiveness is linked to greater commercial success in the global pet trade. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 118(14), e2016337118. <https://doi.org/10.1073/pnas.2016337118>
- Guzy, J. C., Falk, B. G., Smith, B. J., Willson, J. D., Reed, R. N., Aumen, N. G., Avery, M. L., Bartoszek, I. A., Campbell, E., Cherkiss, M. S., Claunch, N. M., Currylow, A. F., Dean, T., Dixon, J., Engeman, R., Funck, S., Gibble, R., Hengstebeck, K. C., Humphrey, J. S., … Hart, K. M. (2023). Burmese pythons in Florida: A synthesis of biology, impacts, and management tools. *NeoBiota*, 80, 1–119. <https://doi.org/10.3897/neobiota.80.90439>
- Hayashi, N., Nakao, R., Ohari, Y., Irie, T., Kouuchi, H., Chatanga, E., Mohamed, W. M. A., Moustafa, M. A. M., Kinoshita, G., Okamoto, M., Yagi, K., & Nonaka, N. (2023). Mitogenomic exploration supports the historical hypothesis of anthropogenic diffusion of a zoonotic parasite *Echinococcus multilocularis*. *iScience*, 26(10), 107741. <https://doi.org/10.1016/j.isci.2023.107741>
- Hulme, P. E., Bacher, S., Kenis, M., Klotz, S., Kühn, I., Minchin, D., Nentwig, W., Olenin, S., Panov, V., Pergl, J., Pyšek, P., Roques, A., Sol, D., Solarz, W., & Vilà, M. (2008). Grasping at the routes of biological invasions: A framework for integrating pathways into policy. *Journal of Applied Ecology*, 45(2), 403–414. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2664.2007.01442.x>
- IPBES. (2019). *Global assessment report on biodiversity and ecosystem services of the Intergovernmental Science-Policy Platform on Biodiversity and Ecosystem Services*. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.6417333>
- IPBES. (2023). *IPBES Invasive Alien Species Assessment: Summary for Policymakers*. Roy, H. E., Pauchard, A., Stoett, P., Renard Truong, T., Bacher, S., Galil, B. S., Hulme, P. E., Ikeda, T., Sankaran, K. V., McGeoch, M. A., Meyerson, L. A., Nuñez, M. A., Ordonez, A., Rahla, S. J., Schwindt, E., Seebens, H., Sheppard, A. W., and Vandvik, V. (Eds.). IPBES Secretariat, Bonn, Germany. <https://doi.org/10.5281/zenodo.11254974>
- JUDGIT. (2025). *JUDGIT!* (Dataset グリーンアノール). JUDGIT! <https://judgit.net/>
- Kitade, T., & Wakao, K. (2022). *Illuminating Amphibians: The amphibian trade in Japan - Wildlife Trade Report from TRAFFIC*. <https://www.traffic.org/publications/reports/illuminating-amphibians-the-amphibian-trade-in-japan/>
- Kobayashi, F., Toyama, M., & Koizumi, I. (2014). Potential resource competition between an invasive mammal and native birds: Overlap in tree cavity preferences of feral raccoons and Ural owls. *Biological Invasions*, 16(7), 1453–1464. <https://doi.org/10.1007/s10530-013-0583-z>
- Lockwood, J. L., Welbourne, D. J., Romagosa, C. M., Cassey, P., Mandrak, N. E., Strecker, A., Leung, B., Stringham, O. C., Udell, B., Episcopio-Sturgeon, D. J., Tlusty, M. F., Sinclair, J., Springborn, M.

- R., Pienaar, E. F., Rhyne, A. L., & Keller, R. (2019). When pets become pests: The role of the exotic pet trade in producing invasive vertebrate animals. *Frontiers in Ecology and the Environment*, 17(6), 323–330. <https://doi.org/10.1002/fee.2059>
- Maceda-Veiga, A., Escrivano-Alacid, J., Martínez-Silvestre, A., Verdaguer, I., & Mac Nally, R. (2019). What's next? The release of exotic pets continues virtually unabated 7 years after enforcement of new legislation for managing invasive species. *Biological Invasions*, 21(9), 2933–2947. <https://doi.org/10.1007/s10530-019-02023-8>
- Miller, M. A., Kinsella, J. M., Snow, R. W., Hayes, M. M., Falk, B. G., Reed, R. N., Mazzotti, F. J., Guyer, C., & Romagosa, C. M. (2017). Parasite spillover: Indirect effects of invasive Burmese pythons. *Ecology and Evolution*, 8(2), 830–840. <https://doi.org/10.1002/ece3.3557>
- Pagad, S., Bisset, S., Genovesi, P., Groom, Q., Hirsch, T., Jetz, W., Ranipeta, A., Schigel, D., Sica, Y. V., & McGeoch, M. A. (2022). Country Compendium of the Global Register of Introduced and Invasive Species. *Scientific Data*, 9(1), 391. <https://doi.org/10.1038/s41597-022-01514-z>
- Pagad, S., Bisset, S., & McGeoch, M. A. (2022). *Country Compendium of the Global Register of Introduced and Invasive Species. Dataset*. [Dataset]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.6348164>
- Roy, H. E., Rabitsch, W., Scalera, R., Stewart, A., Gallardo, B., Genovesi, P., Essl, F., Adriaens, T., Bacher, S., Booy, O., Branquart, E., Brunel, S., Copp, G. H., Dean, H., D'hondt, B., Josefsson, M., Kenis, M., Kettunen, M., Linnamagi, M., … Zenetos, A. (2018). Developing a framework of minimum standards for the risk assessment of alien species. *Journal of Applied Ecology*, 55(2), 526–538. <https://doi.org/10.1111/1365-2664.13025>
- Ryan, S. J., Carlson, C. J., Mordecai, E. A., & Johnson, L. R. (2019). Global expansion and redistribution of Aedes-borne virus transmission risk with climate change. *PLoS Neglected Tropical Diseases*, 13(3), e0007213. <https://doi.org/10.1371/journal.pntd.0007213>
- Simberloff, D. (2009). The Role of Propagule Pressure in Biological Invasions. *Annual Review of Ecology, Evolution, and Systematics*, 40(Volume 40, 2009), 81–102. <https://doi.org/10.1146/annurev.ecolsys.110308.120304>
- Stringham, O. C., & Lockwood, J. L. (2018). Pet problems: Biological and economic factors that influence the release of alien reptiles and amphibians by pet owners. *Journal of Applied Ecology*, 55(6), 2632–2640. <https://doi.org/10.1111/1365-2664.13237>
- Timm, R. M., Cuarón, A. D., Reid, F., Helgen, K., & González-Maya, J. F. (2016). *IUCN Red List of Threatened Species: Procyon lotor* [Dataset]. <https://www.iucnredlist.org/en>
- UNEP-WCMC & JNCC. (2021). *Zoonotic potential of international trade in CITES listed species*. (No. 678; JNCC Report). JNCC. <https://data.jncc.gov.uk/data/964ae259-410e-4205-8ec7-e2c54f5c6e3d/jncc-report-678.pdf>
- USFWS. (2012). U.S. Fish and Wildlife Service. *The Economic Cost of Large Constrictor Snakes*. <https://www.sprep.org/attachments/> VirLib/Global/economic-cost-large-snakes.pdf
- USGS. (2025a). “How have invasive pythons impacted Florida ecosystems?” <https://www.usgs.gov/faqs/how-have-invasive-pythons-impacted-florida-ecosystems>
- USGS. (2025b). *How many Burmese pythons inhabit southern Florida?* <https://www.usgs.gov/faqs/how-many-burmese-pythons-inhabit-southern-florida>
- Velasco, D., Hernandez, M., & Miner, K. (2022). “*Managing Non-Native Burmese Pythons in Southern Florida.*” CART. <https://www.fws.gov/project/managing-burmese-pythons-florida>
- Venette, R. C., Gordon, D. R., Juzwik, J., Koch, F. H., Liebhold, A. M., Peterson, R. K. D., Sing, S. E., & Yemshanov, D. (2021). Early Intervention Strategies for Invasive Species Management: Connections Between Risk Assessment, Prevention Efforts, Eradication, and Other Rapid Responses. In T. M. Poland, T. Patel-Weyand, D. M. Finch, C. F. Miniat, D. C. Hayes, & V. M. Lopez (Eds.), *Invasive Species in Forests and Rangelands of the United States: A Comprehensive Science Synthesis for the United States Forest Sector* (pp. 111–131). Springer International Publishing. https://doi.org/10.1007/978-3-030-45367-1_6
- Wallensten, A. (2007). Influenza virus in wild birds and mammals other than man. *Microbial Ecology in Health and Disease*, 19(2), 122–139. <https://doi.org/10.1080/08910600701406786>
- Wikramanayake, E., Pfeiffer, D., Magouras, I., Conan, A., Ziegler, S., Bonebrake, T. C., Yoganand, K., & Olson, D. (2021). Evaluating wildlife markets for pandemic disease risk. *The Lancet. Planetary Health*, 5(7), e400–e401. [https://doi.org/10.1016/S2542-5196\(21\)00143-1](https://doi.org/10.1016/S2542-5196(21)00143-1)
- Willson, J. D., Dorcas, M. E., & Snow, R. W. (2011). Identifying plausible scenarios for the establishment of invasive Burmese pythons (*Python molurus*) in Southern Florida. *Biological Invasions*, 13(7), 1493–1504. <https://doi.org/10.1007/s10530-010-9908-3>
- 揚妻・柳原, 芳美. (2004). 愛知県におけるアライグマ野生化の過程と今後の対策のあり方について. *哺乳類科学*, 44(2), 147–160. <https://doi.org/10.11238/mammalianscience.44.147>
- 安部哲人. (2009). 小笠原諸島における送粉系搅乱の現状とその管理戦略. *地球環境*, 14(1), 47–55.
- 雨宮徹. (2022, April 18). 体長2mのヘビ「ポールパイソン」逃げる岡山・倉敷の駐車場. *朝日新聞*. <https://www.asahi.com/articles/ASQ4L36LHQ4LPPZB001.html>
- 池田透, 阿部豪, & 立澤史郎. (2004). 北海道野幌森林公園における外来アライグマと在来エゾタヌキの関係(1) -空間利用からみた種間関係-. 日本生態学会大会講演要旨集, *ESJ51*, 518–518. <https://doi.org/10.14848/esj.ESJ51.0.518.0>
- 井上駿. (2016, May 28). 神社で幸運の「白ヘビ」発見！でも実は… Retrieved 2026年1月22日, from 有馬署が一時保護しているカリフォルニアキングスネーク=神戸市北区藤原台北町6… - 一般社団法人ネットメディアこうべ | Facebook
- 大庭伸也. (2021). 特定外来生物アライグマの家屋汚損被害と業者による対策の記録. *長崎県生物学会誌*, 89, 67–70.

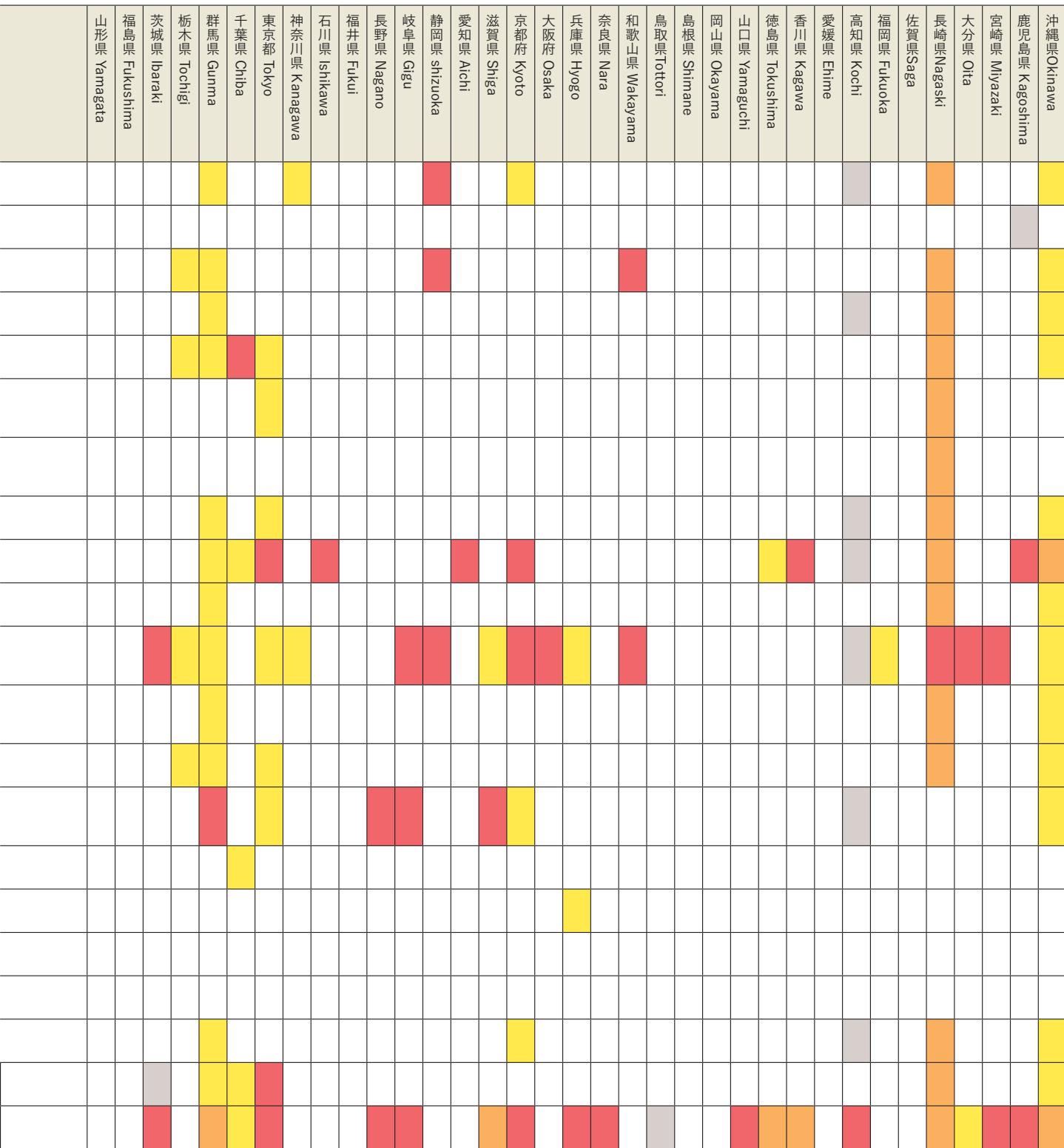
- 沖縄県. (2025). グリーンアノール. 沖縄外来種.com. <https://okinawa-gairaisyu.com/zukan/green-anole/>
- 苅部治紀. (2005). 外来種グリーンアノールが小笠原の在来昆虫に及ぼす影響. 爬虫両棲類学会報, 2005(2), 163–168. <https://doi.org/10.14880/hrghsj1999.2005.163>
- 苅部治紀. (2009). 小笠原諸島のトンボ目の現状、特に固有種の保全に向けた取り組みについて. 陸水学雑誌, 70(3), 239–245. <https://doi.org/10.3739/rikusui.70.239>
- 環境省. (2011). 平成22年度外来生物問題等認知度調査業務報告書. https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/files_report/h22_questionnaire_report.pdf
- 環境省. (2012, June 27). 外来生物法の施行状況を踏まえた現状と課題について. <https://www.env.go.jp/council/former2013/13wild/y133-04/mat02.pdf>
- 環境省. (2020). 鳥獣関係統計 [Dataset]. <https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs2.html>
- 環境省. (2022). 令和4年度動物の虐待事例等調査報告書. https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/r0503/full.pdf
- 環境省. (2023). 生物多様性国家戦略2023-2030. <https://www.env.go.jp/content/000124381.pdf>
- 環境省. (2025, March). アライグマ防除の手引き. 自然環境局 野生生物課 外来生物対策室. https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/araiguma_tebiki_kansei.pdf
- 環境省, 農林水産省, & 国土交通省. (2025, March 28). 外来種被害防止行動計画 第2版. <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/actionplan2/actionplan.pdf>
- 栗山武夫, 浅妻祐一郎, & 高木俊. (2021). アライグマの分布拡大と在来生態系へ影響. 環動昆, 32(3), 131–136. <https://doi.org/10.11257/jjeez.32.131>
- 栗山武夫, & 沼田寛生. (2020). 兵庫県神戸市におけるニホンアカガエル繁殖期に出没・カエルを捕食したアライグマの記録. 兵庫ワイルドライフモノグラフ, (12), 35–48
- 厚生労働省. (2013). カメ等のハ虫類を原因とするサルモネラ症に係る注意喚起について. <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekakku-kansenshou19/dl/20130812-01.pdf>
- 国土交通省, & 環境省. (2015, April 21). アベサンショウウオ保護増殖事業計画. <https://www.env.go.jp/content/900491224.pdf>
- 国立環境研究所. (2022, March). 気候変動の影響と適応策—ダニ媒介感染症—. Retrieved 2026年1月22日, from https://adaptation-platform.nies.go.jp/local/infographic/pdf/5_tickborneInfection.pdf
- 埼玉県生物多様性センター. (2024). 九都県市首都圏連合協議会における共同取組の検討について. Retrieved 2026年1月27日, from <https://saitama-biodiversity-center-cessgis.hub.arcgis.com/pages/9tokenshi-syunoukaigikubiaka>
- 財務省. (2025). 特定外来生物防除等対策事業. https://www.mof.go.jp/policy/budget/topics/budget_execution_audit/fy2025/sy0706/27.pdf
- 札幌ザリガニ研究会. (2025, March). ニホンザリガニの保全方針. 応用生態工学会
- 森林総合研究所. (2006). 小笠原のカタツムリを滅ぼす侵入者. Retrieved 2026年1月27日, from <https://www.ffpri.go.jp/labs/kouho/Press-release/2005/ogasawara20060201.html>
- 鈴木晶子. (2000). 小笠原諸島における、移入種と在来種のトカゲ2種の関係 [PhD Thesis, 奈良女子大学]. <https://doi.org/10.11501/3170243>
- 高桑正敏, & 須田真一. (2004). オガサワラシジミの衰亡とその要因. 神奈川博調査研報, 12, 47–53.
- 高橋洋生, 八巻明香, & 秋田耕佑. (2014). 小笠原諸島におけるグリーンアノールの食性と在来昆虫群集への影響. 爬虫両棲類学会報, 2014(2), 158–167.
- 東京都環境局. (2023, October 23). アライグマ・ハクビシンについて 東京都環境局. 環境局. https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/animals_plants/raccoon/habit
- とちテレニュース (Director) . (2023, June 27). 宇都宮市の住宅地でヘビ捕獲 日本の自然下にいないはずのアメリカ原産コーンスネーク [Broadcast]. とちぎテレビ. Retrieved 2026年1月27日, from <https://news.livedoor.com/article/detail/24500988/>
- 戸田光彦, 中川直美, & 鋤柄直純. (2009). 小笠原諸島におけるグリーンアノールの生態と防除. 地球環境, 14(1), 39–46.
- 農林水産省. (2018). 中型獣の生態と特徴. In 野生鳥獣被害防止マニュアル-アライグマ、ハクビシン、タヌキ、アナグマ- (中型獣類編). https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/manyuaru/manual_tyuugata_jyuuui/180330-4.pdf
- 農林水産省. (2023). 農作物被害状況 [Dataset]. <https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/zyoukyou/index.html>
- 横原寛, 北島博, 後藤秀章, 加藤徹, & 牧野俊一. (2004). グリーンアノールが小笠原諸島の昆虫相、特にカミキリムシ相に与えた影響—昆虫の採集記録と捕食実験からの評価—. 森林総合研究所研究報告, 3(2), 165–183.
- 米島万有子, 中谷友樹, & 崔明姫. (2018). 全国調査からみた文化財保有社寺における獣害. 歴史都市防災論文集, 12, 99–106.
- 若尾慶子. (2025). ペット・展示利用されるカメ—日本の取引動向と課題. 遺伝: 生物の科学, 日本の淡水生・陸生カメ類の危機と保全, 79(6), 524–530.
- 若尾慶子, Janssen, J., & Chng, S. (2018). 日本における爬虫類ペット市場の現状. 自然保護助成基金成果報告書, 27. https://www.wwf.or.jp/activities/data/20180320_wildlife02.pdf
- 鷺谷いづみ. (2007). 外来種の定着と侵略性の生態学的要因. 日本水産学会誌, 73(6), 1117–1120. <https://doi.org/10.2331/suisan.73.1117>
- 亘悠哉. (2011). 失敗の活用—外来種を減らせない場合の解決策. In 日本の外来哺乳類. 東京大学出版会.
- 亘悠哉. (2025). 人獣共通感染症リスクと侵略的外来種問題. 日本生態学会誌, 75(1), 11–25. <https://doi.org/10.18960/seitai.2207>

別添

表1B-1 日本で外来種として認識されている主な種—哺乳類

Table 1B-1 : Major Mammalian species recognized as Alien species in Japan

由来の国内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	1	真無盲腸目 Eulipotyphla	ハリネズミ科 Erinaceidae	ハリネズミ属 Erinaceus spp.	Pets	Exhibition	-	-			
Ex	2	真無盲腸目 Eulipotyphla	トガリネズミ科 Soricidae	ジャコウネズミ Suncus murinus	Unintentional · Experimentation	Experimentation · Exhibition	-	-			
Ex	3	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	タイワンザル Macaca cyclopis	Exhibition	Exhibition	-	-			
Ex	4	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	カニクイザル Macaca fascicularis	Exhibition	Exhibition · Experimentation	X	X			
Ex	5	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	アカゲザル Macaca muatta	Exhibition · Experimentation	Exhibition · Experimentation	X	X			
Ex	6	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	アカゲザル × ニホンザル Macaca mulatta × M. fuscata	?	N/A	-	-			
Ex	7	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	タイワンザル × ニホンザル Macaca cyclopis × M. fuscata	?	N/A	-	-			
Ex	8	サル目（霊長目） Primates	オマキザル科 Cebidae	コモンリスザル／リスザル Saimiri sciureus	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition · Experimentation	X	-			
Ex	9	ウサギ目 Lagomorpha	ウサギ科 Leporidae	カイウサギ／アナウサギ Oryctolagus cuniculus	Fur · Livestock · Pets	Pets · Exhibition · Experimentation	-	-			
Ex	10	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	フィンレイソンリス Callosciurus finlaysonii	?	Exhibition	-	-			
Ex	11	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	クリハラリス／タイワンリス Callosciurus erythraeus	Pets · Exhibition	Exhibition · Hunting	X	-			
Ex	12	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	トウブハイイロリス／ハイイロリス Sciurus carolinensis	Pets · Exhibition	Exhibition	X	-			
Ex	13	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	キタリス Sciurus vulgaris	Pets · Exhibition	Exhibition	X	X			
Ex	14	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	シマリス／チヨウセンシマリス Tamias sibiricus barberi	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition · Hunting	-	-			
Ex	15	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	オグロプレーーリードッグ Cynomys ludovicianus	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	X	X			
Ex	16	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	プレーリードッグの一種 Cynomys sp.	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	X	X			
Ex	17	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	オオアメリカモモンガ Glaucomys sabrinus	Pets	Pets	-	-			
Ex	18	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	アメリカモモンガ Glaucomys volans	Pets	Pets	-	X			
Ex	19	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	リス科 Sciuridae	タイリクモモンガ Pteromys volans	Pets	N/A	-	-			
Ex	20	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	キヌネズミ科 Cricetidae	マスクラット Ondatra zibethicus	Fur	N/A	-	-			
Ex	21	ネズミ目（齧歯目） Rodentia	ネズミ科 Muridae	ハツカネズミ Mus musculus	Unintentional	Pets (variant) · Experimentation	-	X			



■ 定着しており対策が必要な外来種 Established alien species requiring management
 ■ 定着しているが特に影響が確認されていないまたは影響が小規模な外来種
 ■ Established alien species with no confirmed impact or only minimal impact
 ■ Not established (or establishment uncertain) alien species requiring preventive measures
 ■ その他 Others

表1B-1 日本で外来種として認識されている主な種—哺乳類（つづき）

Table 1B-1 : Major Mammalian species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	22	ネズミ目（齧歯目）Rodentia	ネズミ科 Muridae	ナンヨウネズミ	Rattus exulans	Unintentional	N/A	-	-		
Ex	23	ネズミ目（齧歯目）Rodentia	ネズミ科 Muridae	ドブネズミ	Rattus norvegicus	Unintentional	Pets (variant) · Experimentation	-	X		
Ex	24	ネズミ目（齧歯目）Rodentia	ネズミ科 Muridae	クマネズミ	Rattus rattus	Unintentional	N/A	-	X		
Ex	25	ネズミ目（齧歯目）Rodentia	ヌートリア科 Myocastoridae	ヌートリア	Myocastor coypus	Fur	Exhibition · Hunting	-	X		
Ex	26	ネズミ目（齧歯目）Rodentia	テンジクネズミ科 Caviidae	テンジクネズミ／モルモット	Cavia porcellus	Pets · Exhibition · Experimentation	Pets · Exhibition · Experimentation	-	-		
Ex	27	ネコ目（食肉目）Carnivora	アライグマ科 Procyonidae	カニクイアライグマ	Procyon cancrivorus	?	?	X	X		
Ex	28	ネコ目（食肉目）Carnivora	アライグマ科 Procyonidae	アライグマ	Procyon lotor	Pets · Exhibition	Exhibition · Hunting	X	X		
Ex	29	ネコ目（食肉目）Carnivora	イヌ科 Canidae	イエイヌ	Canis lupus familiaris	Pets · Labour	Pets · Labour · Exhibition	X	X		
Ex	30	ネコ目（食肉目）Carnivora	イタチ科 Mustelidae	フェレット	Mustela putorius furo	Pets	Pets · Experimentation	X	X		
Ex	31	ネコ目（食肉目）Carnivora	イタチ科 Mustelidae	アメリカミンク／ミンク	Mustela vison	Fur	Exhibition · Hunting	-	-		
Ex	32	ネコ目（食肉目）Carnivora	ジャコウネコ科 Viverridae	ハクビシン	Paguma larvata	Fur	Exhibition · Hunting	-	-		
Ex	33	ネコ目（食肉目）Carnivora	ネコ科 Felidae	イエネコ	Felis catus	Pets · Pest control	Pets · Exhibition	X	-		
Ex	34	ネコ目（食肉目）Carnivora	マンガース科 Herpestidae	フイリマンガース	Urva europunctata	Pest control	Exhibition	X	X		
Ex	35	ネコ目（食肉目）Carnivora	マンガース科 Herpestidae	ジャワマンガース	Urva javanica	Pest control	N/A	-	X		
Ex	36	ネコ目（食肉目）Carnivora	マンガース科 Herpestidae	シママンガース	Mungos mungos	N/A	Exhibition	-	-		
Ex	37	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	イノシシ科 Suidae	イノシシ・イノブタ・ノブタ	Sus scrofa	Hunting · Livestock	Hunting · Livestock · Exhibition	-	-		
Ex	38	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	マリアナジカ	Cervus mariannus	Livestock	N/A	-	-		
Ex	39	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	タイワンジカ(交雑)	Cervus nippon taiouanus (Hybrid)	Hunting · Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	40	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	シカ属（国内産ニホンジカを除く）	Cervus spp. (exc. Cervus nippon)	Hunting · Exhibition	Hunting · Exhibition	-	-		
Ex	41	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	アキシスジカ属／アクシスジカ属	Axis spp.	Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	42	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	ダマジカ属	Dama spp.	Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	43	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	シフソウ	Elaphurus davidianus	Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	44	ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla	シカ科 Cervidae	キヨン	Muntiacus reevesi	Exhibition	Exhibition	-	-		

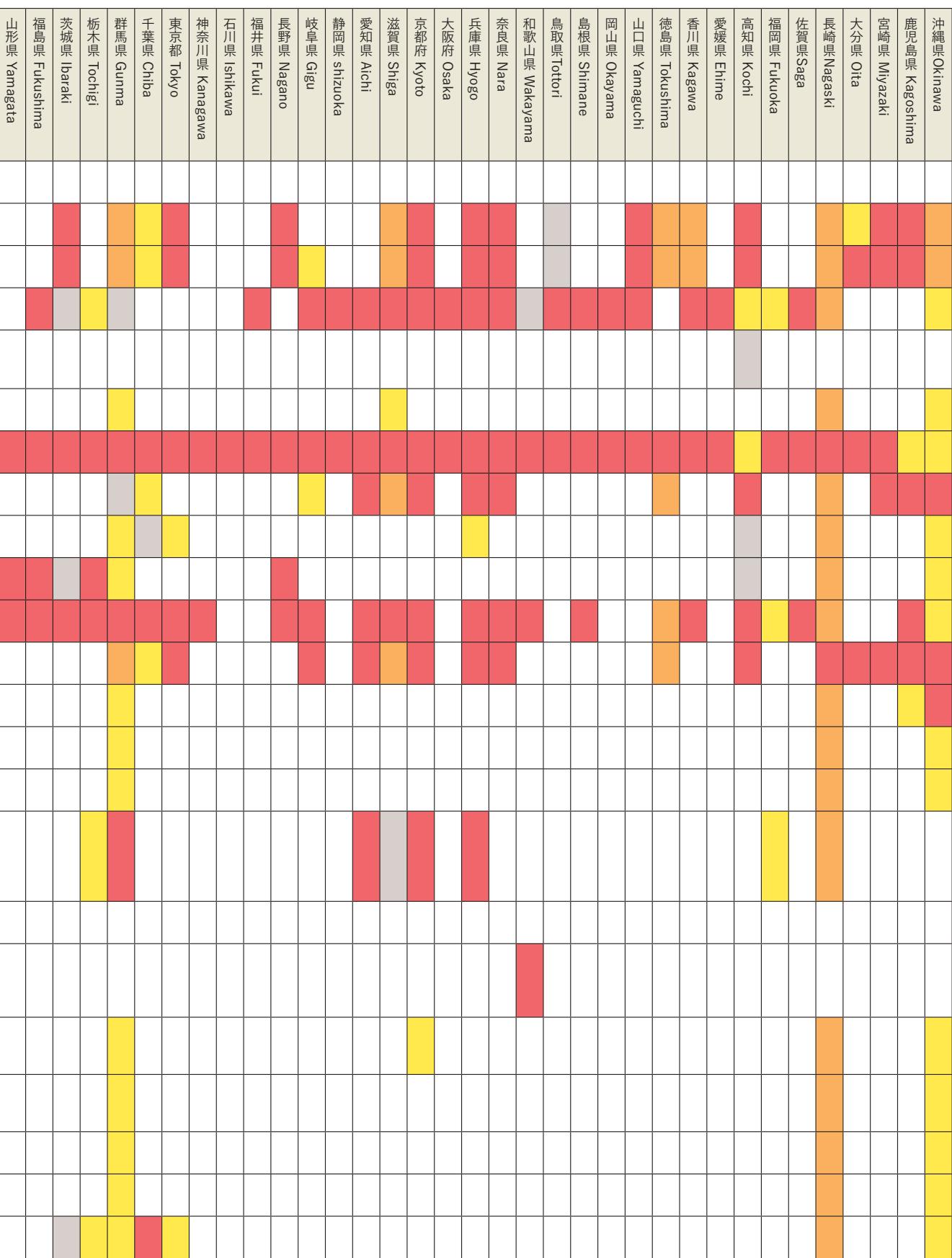


表1B-1 日本で外来種として認識されている主な種—哺乳類（つづき）

Table 1B-1 : Major Mammalian species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	45	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	ウシ科 Bovidae	ウシ	Bos taurus	Livestock	Livestock · Exhibition	-	-		
Ex	46	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	ウシ科 Bovidae	ヤギ	Capra hircus	Livestock	Livestock · Exhibition · Pets	-	-		
Ex	47	奇蹄目 Perissodactyla	ウマ科 Equidae	ウマ	Equus caballus	Livestock · Labour	Livestock · Exhibition · Pets	-	-		
Ex	48	双前歯目 Diprotodontia	フクロモモンガ 科 Petauridae	フクロモモンガ の一種(例) Petaurus notatus)	Petaurus sp.	Pets	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	49	双前歯目 Diprotodontia	クスクス科 Phalangeridae	フクロギツネ	Trichosurus vulpecula	Pets	Exhibition	X	X		
Ex	50	双前歯目 Diprotodontia	カンガルー科 Macropodidae	ワラビー wallabies	—	Exhibition · Pets	Exhibition · Pets	-	-		
In	1	モグラ目（食虫 目）	トガリネズミ科 Soricidae	ニホンジネズ ミ	Crocidura dsinezumi	Unintentional	N/A	-	-		
In	2	コウモリ目（翼 手目）	ヒナコウモリ科 Vespertilionidae	アブラコウモ リ／イエコウ モリ	Pipistrellus abramus	Unintentional	N/A	-	-		
In	3	サル目（霊長目） Primates	オナガザル科 Cercopithecidae	ヤクシマザル	Macaca fuscata yakui	?	Exhibition	-	-		
In	4	ネコ目（食肉目） Carnivora	イヌ科 Canidae	タヌキ [奥尻 島、知夫里 島、屋久島]	Nyctereutes procyonoides	?	Exhibition · Hunting · Pets	X	X		
In	5	ネコ目（食肉目） Carnivora	イヌ科 Canidae	キタキツネ	Vulpes vulpes schrencki	?	Exhibition	X	X		
In	6	ネコ目（食肉目） Carnivora	イタチ科 Mustelidae	テン[北海道、 佐渡]	Martes melampus	Fur · Pest control	Exhibition	-	-		
In	7	ネコ目（食肉目） Carnivora	イタチ科 Mustelidae	ニホンイタチ [伊豆諸島な ど]	Mustela itatsi	Fur · Pest control	Exhibition · Hunting	-	-		
In	8	ネコ目（食肉目） Carnivora	イタチ科 Mustelidae	チョウセンイ タチ／シベリ アイタチ	Mustela sibirica	Fur · Pest control	N/A	-	X		
In	9	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	イノシシ科 Suidae	ニホンイノシ シ [徳之島な ど]	Sus scrofa leucomystax	Hunting · Livestock	Hunting	X	X		
In	10	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	シカ科 Cervidae	ニホンジカ [新島など]	Cervus nippon	Hunting · Exhibition	Hunting · Exhibition	-	-		
In	11	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	シカ科 Cervidae	ケラマジカ	Cervus nippon keramae	Hunting	N/A	-	-		
In	12	ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla	シカ科 Cervidae	マゲジカ	Cervus nippon mageshima	Exhibition	Exhibition	-	-		

一部を除き2025年6月現在の情報による。

英訳は参考であり、日本語を正とする

1) Ex : 海外原産の動物、In : 国内由来の動物

2) 国内の発症事例による。

作成協力 : いであ株式会社

Except for some items, the information is current as of June 2025.

The English translation is for reference only; the Japanese text takes precedence.

1) Ex: Alien species introduced from abroad、In: Domestically introduced alien species

2) Based on domestic case reports

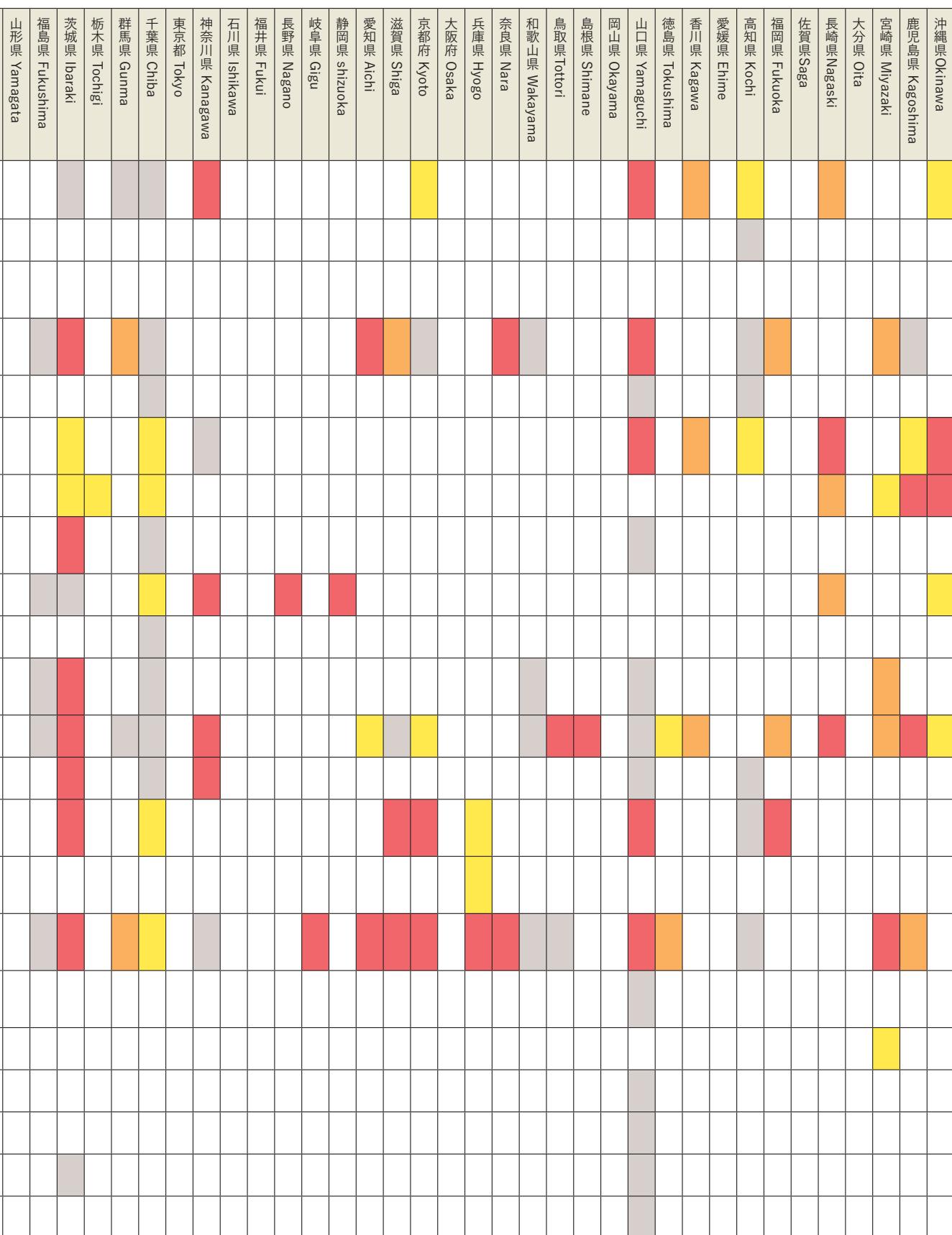
This table was prepared based on survey data provided by IDEA Consultants, Inc.

沖縄県 Okinawa			
鹿児島県 Kagoshima		■	■
宮崎県 Miyazaki			
大分県 Oita			
長崎県 Nagasaki			
佐賀県 Saga			
福岡県 Fukuoka			
高知県 Kochi			
愛媛県 Ehime			
香川県 Kagawa			
徳島県 Tokushima			
三口県 Yamaguchi	■		
岡山県 Okayama			
鳥取県 Tottori			
和歌山県 Wakayama			
奈良県 Nara			
兵庫県 Hyogo			
大阪府 Osaka			
京都府 Kyoto			
滋賀県 Shiga			
愛知県 Aichi			
静岡県 Shizuoka			
岐阜県 Gifu			
長野県 Nagano			
福井県 Fukui			
石川県 Ishikawa			
神奈川県 Kanagawa			
東京都 Tokyo			
千葉県 Chiba		■	■
群馬県 Gunma		■	■
栃木県 Tochigi		■	■
茨城県 Ibaraki		■	■
福島県 Fukushima		■	■
山形県 Yamagata		■	■

表1B-2 日本で外来種として認識されている主な種—鳥類

Table 1B-2 : Major Avian species recognized as Alien species in Japan

由来の国 内外別の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	1	キジ目 Galliformes	ハイイロウズラ 科 Odontophoridae	コリンウズラ	<i>Colinus virginianus</i>	Hunting dog training	Pets	-	-		
Ex	2	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	ヒメウズラ	<i>Coturnix chinensi</i>	Pets	Pets · Experimentation	-	-		
Ex	3	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	テッケイ	<i>Bambusicola thoracica sonorivox</i>	Hunting	N/A	-	-		
Ex	4	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica thoracica</i>	Hunting · Pets	Pets · Exhibition · Hunting	-	-		
Ex	5	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>	Poultry · Pets	Poultry · Pets	X	X		
Ex	6	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	コウライキジ (大陸産亜種)	<i>Phasianus colchicus karpowi</i>	Hunting	Hunting · Exhibition	-	-		
Ex	7	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	インドクジヤ ク	<i>Pavo cristatus</i>	Exhibition · Pets	Exhibition	-	-		
Ex	8	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	シナガチョウ ／サカツラガ ン	<i>Anser cygnoides</i>	Poultry · Pets	Poultry · Pets · Exhibition	-	-		
Ex	9	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	カナダガン	<i>Branta canadensis</i>	Exhibition · Hunting · Pets	Exhibition	-	-		
Ex	10	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	シジュウカラ ガン	<i>Branta hutchinsii</i>	Exhibition · Pets	Exhibition	-	-		
Ex	11	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	コクチョウ	<i>Cygnus atratus</i>	Exhibition · Pets · Consumption	Exhibition	-	-		
Ex	12	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	コブハクチ ウ	<i>Cygnus olor</i>	Exhibition · Pets	Exhibition	X	X		
Ex	13	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	バリケン	<i>Cairina moschata</i>	Poultry	Poultry · Pets	-	-		
Ex	14	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	アヒル	<i>Anas platyrhynchos domesticus</i>	Poultry · Exhibition · Pets	Poultry · Exhibition · Pets	X	X		
Ex	15	カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	アイガモ	<i>Anas platyrhynchos domesticus</i>	Poultry	Poultry · Pets	-	-		
Ex	16	ハト目 Columbiformes	ハト科 Columbidae	ドバト／カラバト	<i>Columba livia</i>	Release · Consumption · Pets · Labour	Pets	X	X		
Ex	17	ハト目 Columbiformes	ハト科 Columbidae	シラコバト	<i>Streptopelia decaocto</i>	Hunting (for hawking) · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	18	コウノトリ目 Ciconiiformes	コウノトリ科 Ciconiidae	インドトキ ウ	<i>Mycteria leucocephala</i>	Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	19	ペリカン目 Pelecaniformes	ペリカン科 Pelecanidae	モモイロペリ カン	<i>Pelecanus onocrotalus</i>	Exhibition	Exhibition · Pets	-	-		
Ex	20	ペリカン目 Pelecaniformes	ペリカン科 Pelecanidae	コシベニペリ カン	<i>Pelecanus rufescens</i>	Exhibition	Exhibition · Pets	-	-		
Ex	21	ツル目 Gruiformes	ツル科 Gruidae	ホオジロカン ムリヅル	<i>Balearica regulorum</i>	Exhibition	Exhibition · Pets	-	-		
Ex	22	ツル目 Gruiformes	ツル科 Gruidae	オオヅル	<i>Grus antigone</i>	Exhibition	Exhibition	-	-		



定着しており対策が必要な外来種 Established alien species requiring management

定着しており対策が必要な外來種 Established alien species requiring management

定着しているが特に影響が確認されていないまたは影響が小規模な外木性
Established alien species with no confirmed impact or only minimal impact

定着していない（または不明だ）が予防が必要な外来種

Not established

表1B-2 日本で外来種として認識されている主な種—鳥類（つづき）

Table 1B-2 : Major Avian species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	23	チドリ目 Charadriiformes	セイタカシギ科 Recurvirostridae	クロエリセイ タカシギ	<i>Himantopus mexicanus</i>	Pets	Pets・Exhibition	-	-		
Ex	24	タカ目 Accipitriformes	コンドル科 Cathartidae	ヒメコンドル	<i>Cathartes aura</i>	Exhibition	Pets・Exhibition	-	-		
Ex	25	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	セキセイイン コ	<i>Melopsittacus undulatus</i>	Pets・Exhibition	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	26	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	キエリボタン インコ	<i>Agapornis personata</i>	Pets・Exhibition	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	27	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	ダルマインコ	<i>Psittacula alexandri</i>	Pets・Exhibition	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	28	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	オオホンセイ インコ	<i>Psittacula eupatria</i>	Pets	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	29	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	ホンセイイン コ	<i>Psittacula krameri</i>	Pets	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	30	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	ワカケホンセ イインコ	<i>Psittacula krameri manillensis</i>	Pets・Exhibition	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	31	オウム目 Psittaciformes	インコ科 Psittacidae	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	Pets・Exhibition	Pets・Exhibition	X	X		
Ex	32	スズメ目 Passeriformes	カラス科 Corvidae	ヤマムスメ	<i>Urocissa caerulea</i>	Pets・Exhibition	N/A	-	-		
Ex	33	スズメ目 Passeriformes	カラス科 Corvidae	サンジャク	<i>Urocissa erythrorhyncha</i>	Pets・Exhibition	Exhibition	-	-		
Ex	34	スズメ目 Passeriformes	カラス科 Corvidae	カササギ	<i>Pica pica</i>	Release・ Exhibition・Pets	N/A	-	-		■
Ex	35	スズメ目 Passeriformes	ヒヨドリ科 Pycnonotidae	シリアカヒヨ ドリ	<i>Pycnonotus cafer</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	36	スズメ目 Passeriformes	ヒヨドリ科 Pycnonotidae	コウラウン	<i>Pycnonotus jocosus</i>	Pets・Exhibition	Exhibition・Pets	X	X		
Ex	37	スズメ目 Passeriformes	ヒヨドリ科 Pycnonotidae	シロガシラ	<i>Pycnonotus sinensis ssp.</i>	Pets	Pets	-	-		
Ex	38	スズメ目 Passeriformes	チメドリ科 Timeliidae	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	39	スズメ目 Passeriformes	チメドリ科 Timeliidae	ヒゲガビチ ョウ	<i>Garrulax cineraceus</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	40	スズメ目 Passeriformes	チメドリ科 Timeliidae	カオグロガビ チョウ	<i>Garrulax perspicillatus</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	41	スズメ目 Passeriformes	チメドリ科 Timeliidae	カオジロガビ チョウ	<i>Garrulax sannio</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	42	スズメ目 Passeriformes	チメドリ科 Timeliidae	ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	43	スズメ目 Passeriformes	メジロ科 Zosteropidae	メジロ (国内 産メジロを除 く)	<i>Zosterops spp. (exc. domestic Z. japonicus)</i>	Pets	Pets	X	X		
Ex	44	スズメ目 Passeriformes	ムクドリ科 Sturnidae	ハッカチョウ	<i>Acridotheres cristatellus</i>	Pets	N/A	-	-		
Ex	45	スズメ目 Passeriformes	ムクドリ科 Sturnidae	モリハッカ	<i>Acridotheres fuscus</i>	Pets・Exhibition	N/A	-	-		
Ex	46	スズメ目 Passeriformes	ムクドリ科 Sturnidae	ハイイロハツ カ	<i>Acridotheres ginginianus</i>	Pets・Exhibition	N/A	-	-		
Ex	47	スズメ目 Passeriformes	ムクドリ科 Sturnidae	インドハッカ	<i>Acridotheres tristis</i>	Pets・Exhibition	N/A	-	-		

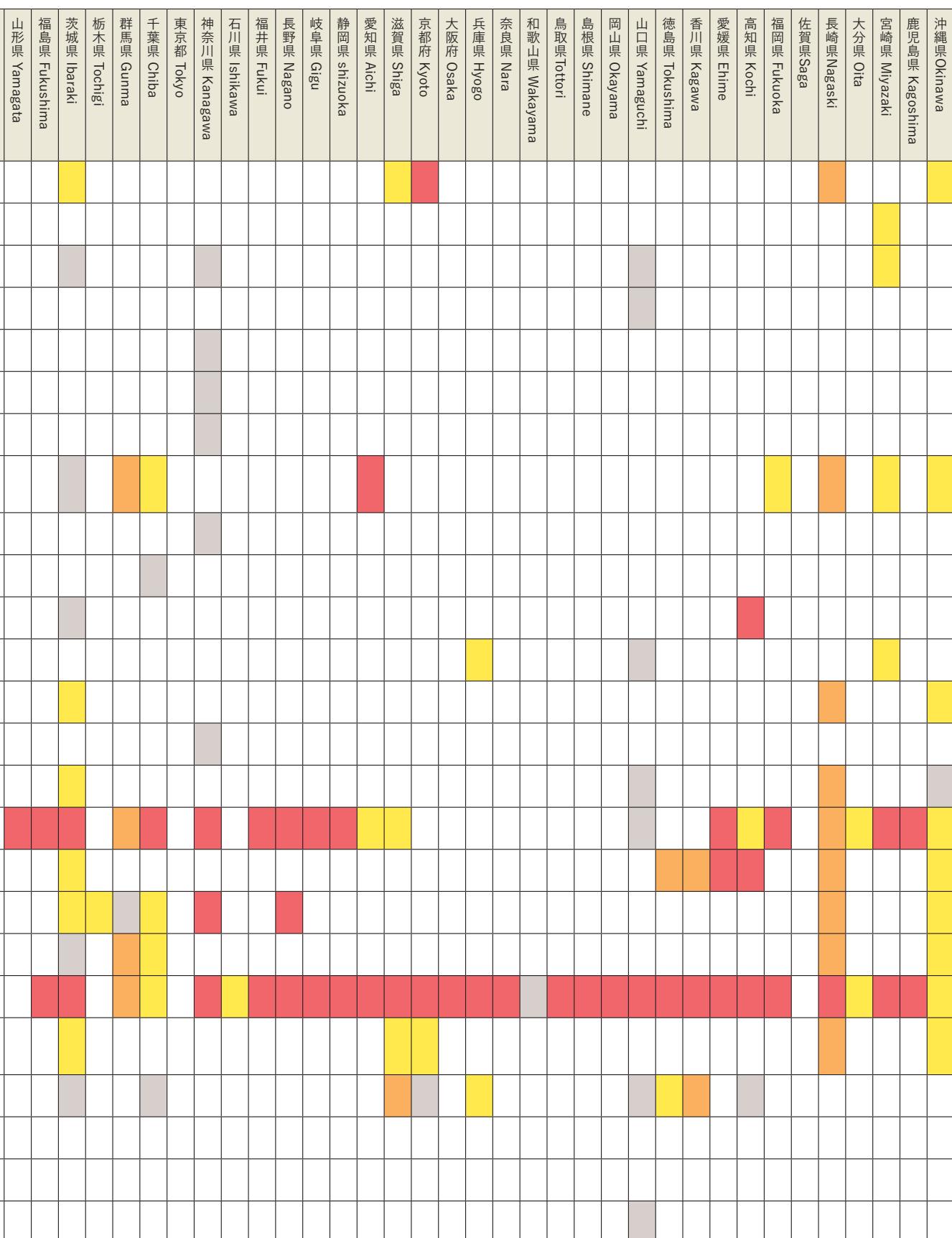


表1B-2 日本で外来種として認識されている主な種—鳥類（つづき）

Table 1B-2 : Major Avian species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
Ex	48	スズメ目 Passeriformes	ムクドリ科 Sturnidae	ホオジロムク ドリ	Sturnus contra	Pets · Exhibition	N/A	-	-		
Ex	49	スズメ目 Passeriformes	ハタオリドリ科 Ploceidae	メンハタオリ ドリ	Ploceus intermedius	Pets · Exhibition	N/A	-	-		
Ex	50	スズメ目 Passeriformes	ハタオリドリ科 Ploceidae	コウヨウジャ ク	Ploceus manyar	Pets · Exhibition	N/A	-	-		
Ex	51	スズメ目 Passeriformes	ハタオリドリ科 Ploceidae	オウゴンチョ ウ	Euplectes afer	Pets · Exhibition	N/A	-	-		
Ex	52	スズメ目 Passeriformes	ハタオリドリ科 Ploceidae	キンランチョ ウ／オオキン ランチョウ	Euplectes orix	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	53	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	ホウコウチョ ウ	Estrilda melpoda	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	54	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	カエデチョウ	Estrilda troglodytes	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	55	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	ベニスズメ	Amandava amandava	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	56	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	キンバラ	Lonchura atricapilla	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	57	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	ヘキチョウ	Lonchura maja	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	58	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	ギンバラ	Lonchura malacca	Pets · Exhibition	N/A	-	-		
Ex	59	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	シマキンバラ ／アミハラ	Lonchura punctulata	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	60	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	コシジロキン バラ	Lonchura striata	Pets · Exhibition	Pets	-	-		
Ex	61	スズメ目 Passeriformes	カエデチョウ科 Estrildidae	ブンチョウ	Padda oryzivora	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	62	スズメ目 Passeriformes	テンニンチョウ 科 Viduidae	テンニンチョ ウ	Vidua macroura	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	63	スズメ目 Passeriformes	テンニンチョウ 科 Viduidae	ホウオウジヤ ク	Vidua paradisaea	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
Ex	64	スズメ目 Passeriformes	フウキンチョウ 科 Thraupidae	コウカンチョ ウ	Paroaria coronata	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-		
In	1	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	ウズラ	Coturnix japonica	Poultry	Poultry · Pets · Exhibition	X	X		
In	2	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	キジ	Phasianus colchicus	Hunting	Exhibition · Hunting	-	-		
In	3	キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	ヤマドリ（ウ スアカヤマド リを含む）	Syrmaticus soemmerringii	Hunting	Poultry · Pets · Exhibition · Hunting	-	-		

一部を除き2025年6月現在の情報による。

英訳は参考であり、日本語を正とする

1) Ex : 海外原産の動物、In : 国内由来の動物

2) 国内の発症事例による。

作成協力：いであ株式会社

Except for some items, the information is current as of June 2025.

The English translation is for reference only; the Japanese text takes precedence.

1) Ex: Alien species introduced from abroad、In: Domestically introduced alien species

2) Based on domestic case reports

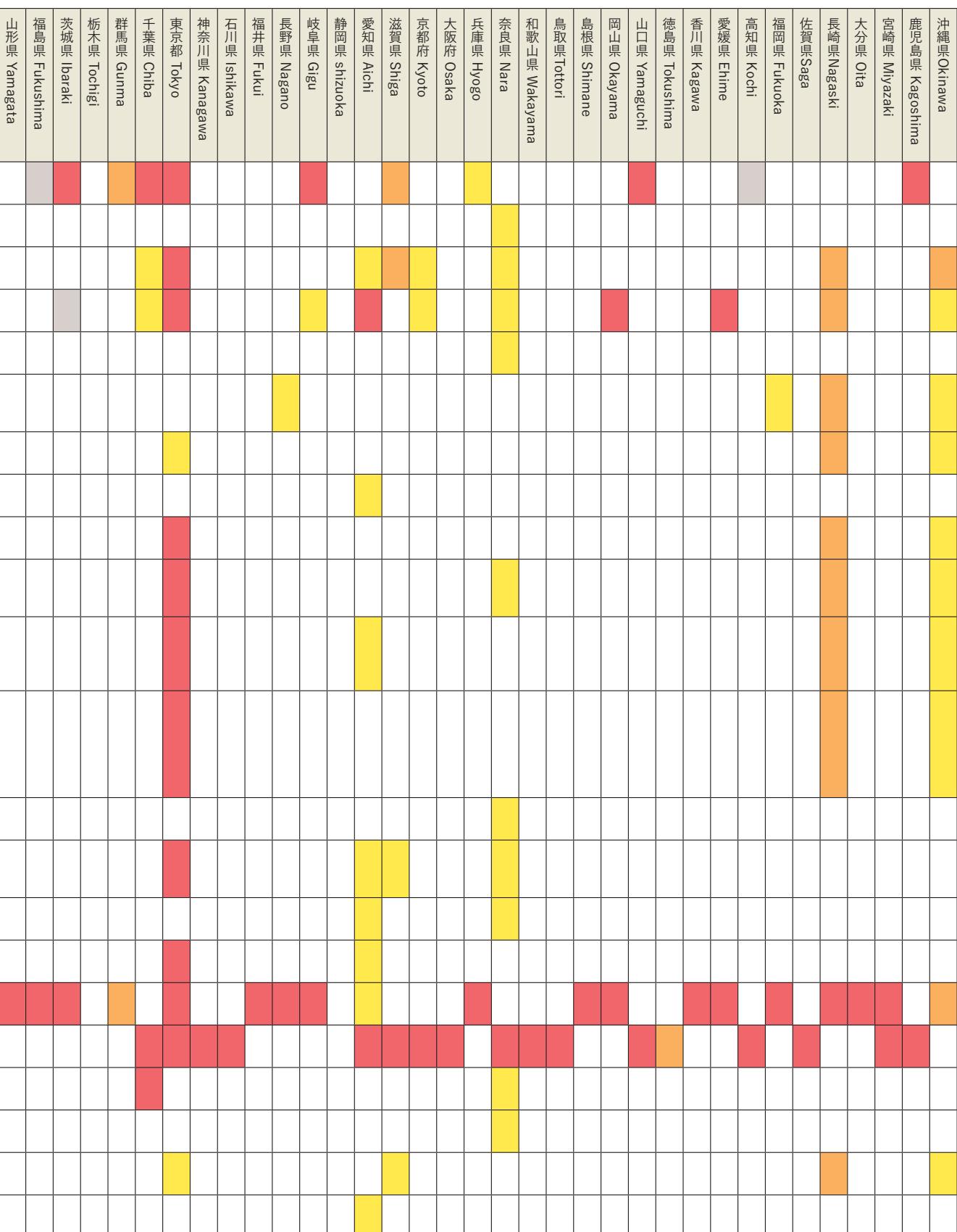
This table was prepared based on survey data provided by IDEA Consultants, Inc.

沖縄県 Okinawa								
鹿児島県 Kagoshima								
宮崎県 Miyazaki								
大分県 Oita								
長崎県 Nagasaki								
佐賀県 Saga								
福岡県 Fukuoka								
高知県 Kochi								
愛媛県 Ehime								
香川県 Kagawa								
徳島県 Tokushima								
三口県 Yamaguchi								
岡山県 Okayama								
鳥取県 Tottori								
和歌山県 Wakayama								
奈良県 Nara								
兵庫県 Hyogo								
大阪府 Osaka								
京都府 Kyoto								
滋賀県 Shiga								
愛知県 Aichi								
静岡県 Shizuoka								
岐阜県 Gifu								
長野県 Nagano								
福井県 Fukui								
石川県 Ishikawa								
神奈川県 Kanagawa								
東京都 Tokyo								
千葉県 Chiba								
群馬県 Gunma								
栃木県 Tochigi								
茨城県 Ibaraki								
福島県 Fukushima								
山形県 Yamagata								

表1B-3 日本で外来種として認識されている主な種—爬虫類

Table 1B-3 : Major Reptile species recognized as Alien species in Japan

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori	
Ex	1	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	Pets	Pets	-	-	■	■	
Ex	2	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	カスピイシガ メ	<i>Mauremys caspica</i>	Pets	Pets	-	-			
Ex	3	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ミナミイシガ メ	<i>Mauremys mutica</i> <i>mutica</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			
Ex	4	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ハナガメ	<i>Mauremys sinensis</i>	Pets · Exhibition	N/A	-	-			
Ex	5	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	マレーハコガ メ	<i>Cuora amboinensis</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	6	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	チュウゴクセ マルハコガメ	<i>Cuora</i> <i>flavomarginata</i> <i>flavomarginata</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	7	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	ニシキガメ属	<i>Chrysemys</i> spp.	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	8	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	キタクロコブ チズガメ	<i>Graptemys</i> <i>nigrinoda</i> <i>nigrinoda</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	9	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	ニセチズガメ	<i>Graptemys</i> <i>pseudogeographica</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	10	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	ミシシッピチ ズガメ	<i>Graptemys</i> <i>pseudogeographica</i> <i>kohnii</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	11	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	トマユチズ ガメ（サビー ンチズガメを 含む）	<i>Graptemys</i> <i>ouachitensis</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	12	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	クーターガメ 属（リオグラ ンデクーター, キタアカハラ ガメ, テキサ スクーター）	<i>Pseudemys</i> spp.	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	13	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	アラバマアカ ハラガメ	<i>Pseudemys</i> <i>alabamensis</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			
Ex	14	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	テネシーケー ター／リバー クーター	<i>Pseudemys</i> <i>concinna</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	15	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	フロリダアカ ハラガメ	<i>Pseudemys</i> <i>nelsoni</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	16	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	ペニンシュラ クーター	<i>Pseudemys</i> <i>peninsularis</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			
Ex	17	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	アカミミガメ	<i>Trachemys</i> <i>scripta</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	X	■	■	
Ex	18	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	ミシシッピア カミミガメ	<i>Trachemys</i> <i>scripta</i> <i>elegans</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	X			
Ex	19	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	キバラガメ	<i>Trachemys</i> <i>scripta</i> <i>scripta</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	X			
Ex	20	カメ目 Testudines	ヌマガメ科 Emydidae	カンバーラン ドキミミガメ	<i>Trachemys</i> <i>scripta</i> <i>troostii</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	X			
Ex	21	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	アメリカスッ ポン属	<i>Apalone</i> spp.	Pets · Exhibition	Pets	-	-	■		
Ex	22	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	フロリダスッ ポン	<i>Apalone</i> <i>ferox</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			



■ 定着しており対策が必要な外来種 Established alien species requiring management
■ 定着しているが特に影響が確認されていないまたは影響が小規模な外来種
■ Established alien species with no confirmed impact or only minimal impact
■ 定着していない（または不明だ）が予防が必要な外来種
■ Not established (or establishment uncertain) alien species requiring preventive measures
■ その他 Others

表1B-3 日本で外来種として認識されている主な種—爬虫類（つづき）

Table 1B-3 : Major Reptile species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori	
Ex	23	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	トゲスッポン	<i>Apalone spinifera</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			
Ex	24	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	チュウゴクス ッポン／シナ スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i> <i>sinensis</i>	Consumption · Exhibition · Pets	Consumption · Pets · Exhibition	-	-			
Ex	25	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	シャンハイハ ナスッポン	<i>Rafetus swinhoei</i>	Consumption	N/A	-	-			
Ex	26	カメ目 Testudines	カミツキガメ科 Chelydridae	カミツキガメ	<i>Chelydra</i> <i>serpentina</i>	Pets	Exhibition	-	-			
Ex	27	カメ目 Testudines	カミツキガメ科 Chelydridae	ワニガメ属	<i>Macrochelys</i> spp.	Pets · Exhibition	Exhibition	-	-			
Ex	28	カメ目 Testudines	ドロガメ科 Kinosternidae	キイロドロガ メ	<i>Kinosternon</i> <i>flavescens</i>	Pets · Exhibition	Pets	-	-			
Ex	29	カメ目 Testudines	ドロガメ科 Kinosternidae	ヒメニオイガ メ	<i>Sternotherus minor</i>	Pets	Pets	-	-			
Ex	30	カメ目 Testudines	ドロガメ科 Kinosternidae	カブトニオイ ガメ	<i>Sternotherus</i> <i>carinatus</i>	Pets	Pets	-	-			
Ex	31	カメ目 Testudines	ドロガメ科 Kinosternidae	ミシシッピニ オイガメ	<i>Sternotherus</i> <i>odoratus</i>	Pets	Pets	-	-			
Ex	32	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	オガサワラヤ モリ	<i>Lepidodactylus</i> <i>lugubris</i>	Unintentional	Pets	-	-			
Ex	33	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	タシロヤモリ	<i>Hemidactylus</i> <i>bowringii</i>	?	Pets	-	-			
Ex	34	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	ホオグロヤモ リ	<i>Hemidactylus</i> <i>frenatus</i>	Unintentional	Pets	-	-			
Ex	35	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	キノボリヤモ リ	<i>Hemiphyllodactylus</i> <i>typus typus</i>	Unintentional	Pets	-	-			
Ex	36	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	アノリス・ア ルログス	<i>Anolis</i> <i>allogus</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	37	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	アノリス・ア ルタケウス	<i>Anolis</i> <i>alutaceus</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	38	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	アノリス・ア ングスティケ プス	<i>Anolis</i> <i>angusticeps</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	39	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	グリーンアノ ール	<i>Anolis carolinensis</i>	Pets · Unintentional	N/A	-	-			
Ex	40	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	ナイトアノー ル	<i>Anolis equestris</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	41	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	ガーマンアノ ール	<i>Anolis garmani</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	42	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	アノリス・ホ モレキス	<i>Anolis homolechis</i>	N/A	N/A	-	-			
Ex	43	有鱗目 Squamata	アノール科 Anolidae	プラウンアノ ール	<i>Anolis sagrei</i>	Pets	N/A	-	-			
Ex	44	有鱗目 Squamata	イグアナ科 Iguanidae	グリーンイグ アナ	<i>Iguana iguana</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	45	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ミドリオオガ シラ	<i>Boiga cyanea</i>	Pets	N/A	-	-			
Ex	46	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	イヌバオオガ シラ	<i>Boiga cynodon</i>	Pets	N/A	-	-			
Ex	47	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	マングローブ ヘビ	<i>Boiga dendrophila</i>	Pets	N/A	-	-			



表1B-3 日本で外来種として認識されている主な種—爬虫類（つづき）

Table 1B-3 : Major Reptile species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori	
Ex	48	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ボウシオオガ シラ	<i>Boiga nigriceps</i>	Pets	N/A	-	-			
Ex	49	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ミナミオオガ シラ	<i>Boiga irregularis</i>	Pets · Unintentional	N/A	-	-			
Ex	50	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	タイワンスジ オ	<i>Elaphe taeniura</i> <i>friesei</i>	Exhibition · Consumption · Pets	N/A	-	-			
Ex	51	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ホンジュラス ミルクヘビ	<i>Lampropeltis</i> <i>triangulum</i> <i>hondurensis</i>	Pets	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	52	有鱗目 Squamata	クサリヘビ科 Viperidae	タイワンハブ'	<i>Protobothrops</i> <i>mucrosquamatus</i>	Exhibition · Consumption	N/A	-	N/A			
Ex	53	カメ目 Testudines	リクガメ科 Testudinidae	インドホシガ メ	<i>Geochelone</i> <i>elegans</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	54	カメ目 Testudines	リクガメ科 Testudinidae	パンケーキガ メ	<i>Malacochersus</i> <i>tornieri</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	55	カメ目 Testudines	リクガメ科 Testudinidae	ヒヨウモンガ メ	<i>Stigmochelys</i> <i>pardalis</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	56	カメ目 Testudines	ヘビクビガメ科 Chelidae	マタマタ	<i>Chelus fimbriatus</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	57	有鱗目 Squamata	トカゲモドキ科 Eublepharidae	ヒヨウモント カゲモドキ	<i>Eublepharis</i> <i>macularius</i>	Pets · Exhibition	Pets · Exhibition	X	-			
Ex	58	有鱗目 Squamata	マブヤ科 Mabuyidae	タテスジマブ ヤ	<i>Eutropis</i> <i>multifasciata</i>	Pets	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	59	有鱗目 Squamata	アガマ科 Agamidae	スインホーキ ノボリトカゲ ／ス温ヒンホ ーキノボリト カゲ	<i>Japalura swinhonis</i>	Pets · Unintentional	N/A	-	-			
Ex	60	有鱗目 Squamata	ニシキヘビ科 Pythonidae	ミドリニシキ ヘビ	<i>Morelia viridi</i>	Pets	Pets · Exhibition	-	-			
Ex	61	有鱗目 Squamata	メクラヘビ科 Typhlopidae	ブラーミニメ クラヘビ	<i>Ramphotyphlops</i> <i>braminus</i>	?	Pets · Exhibition	-	-			
In	1	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ヤエヤマセマ ルハコガメ [沖縄諸島]	<i>Cuora</i> <i>flavomarginata</i> <i>evelynae</i>	Pets	Exhibition	-	-			
In	2	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ヤエヤマイシ ガメ [沖縄諸 島及び宮古 島]	<i>Mauremys</i> <i>mutica</i> <i>kami</i>	Pets · Exhibition	Exhibition	-	-			
In	3	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ニホンイシガ メ	<i>Mauremys japonica</i>	Pets	Pets · Exhibition	-	-			
In	4	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ニホンイシガ メ×クサガメ ／ウンキュウ	<i>Mauremys japonica</i> × <i>Mauremys</i> <i>reevesii</i>	Pets	Pets	-	-			
In	5	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ニホンイシガ メ×ハナガメ	<i>Mauremys japonica</i> × <i>Mauremys</i> <i>sinensis</i>	Pets	N/A	-	-			
In	6	カメ目 Testudines	イシガメ科 Geoemydidae	ハナガメ×ク サガメ	<i>Mauremys sinensis</i> × <i>Mauremys</i> <i>reevesii</i>	Pets	N/A	-	-			
In	7	カメ目 Testudines	スッポン科 Trionychidae	ニホンスッポン 〔琉球列島〕	<i>Pelodiscus sinensis</i> <i>japonicus</i>	Consumption	Consumption · Pets · Exhibition	-	-			
In	8	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	ミナミヤモリ	<i>Gekko hokouensis</i>	Unintentional	Pets	-	-			

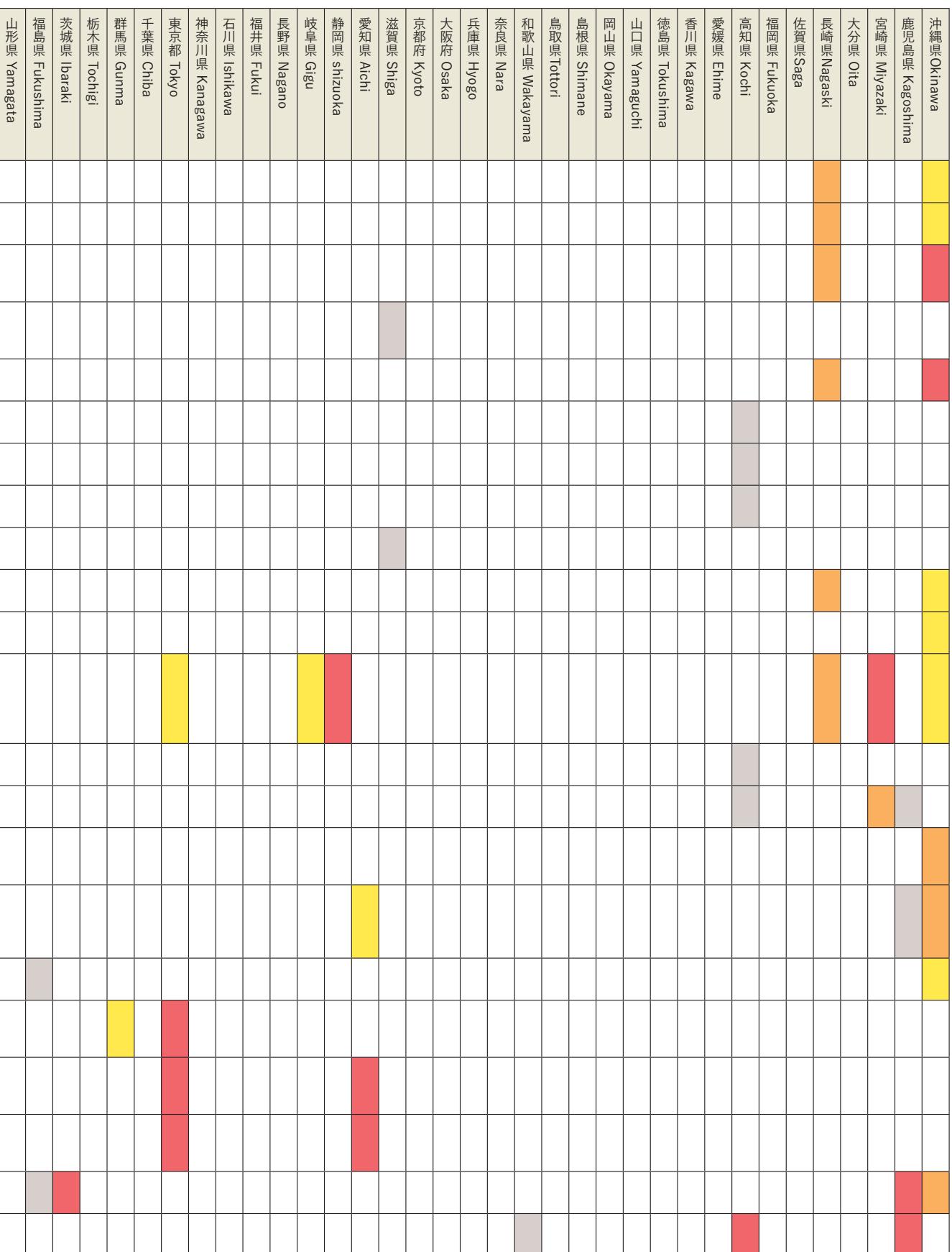


表1B-3 日本で外来種として認識されている主な種—爬虫類（つづき）

Table 1B-3 : Major Reptile species recognized as Alien species in Japan (Continued)

由来の国 内外の別 ¹⁾ Source: Abroad or domestic ¹⁾	整理番号 No.	目名 Order	科名 Family	和名 [対象生息地] Common Japanese name [its habitat]	学名 Scientific name	輸入・移入の 目的 Primary purpose of introduction	現在の利用状況 Current purpose	感染症 (他の動物種) ²⁾ Infectious disease (transmissible to other animals) ²⁾	感染症 (人獣共通) ²⁾ Zoonosis ²⁾	北海道 Hokkaido	青森県 Aomori
In	9	有鱗目 Squamata	ヤモリ科 Gekkonidae	ニホンヤモリ	Gekko japonicus	Unintentional	Pets	-	-		
In	10	有鱗目 Squamata	トカゲ科 Scincidae	ニホントカゲ [伊豆諸島]	Plestiodon japonicus	?	Pets	-	-		
In	11	有鱗目 Squamata	アガマ科 Agamidae	オキナワキノ ボリトカゲ [九州]	Japalura polygonata polygonata	Pets · Unintentional	N/A	-	-		
In	12	有鱗目 Squamata	カナヘビ科 Lacertidae	アムールカナ ヘビ	Takydromus amurensis	?	Pets	-	-	■	
In	13	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ヒバカリ	Amphiesma vibakari	?	Pets	-	-	■	
In	14	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	アオダイショ ウ	Elaphe climacophora	Unintentional · Pest control ?	Pets	-	-		
In	15	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	ヤマカガシ	Rhabdophis tigrinus	?	N/A	-	-	■	
In	16	有鱗目 Squamata	ナミヘビ科 Colubridae	シマヘビ	Elaphe quadrivirgata	?	Pets	-	-		
In	17	有鱗目 Squamata	タカチホヘビ科 Xenodermidae	タカチホヘビ	Achalinus spinalis	?	Pets	-	-	■	
In	18	有鱗目 Squamata	クサリヘビ科 Viperidae	ハブ [伊平屋島、古宇利島、伊江島、瀬底島、屋我地島、伊計島、宮城島（うるま）、平安座島、敷地島、浜比嘉島、津堅島、浮原島、沖縄島、黒島（渡嘉敷）、城島、儀志布島、渡嘉敷島、渡名喜島、久米島及びオーハ島以外]	Protobothrops flavoviridis	Consumption · Exhibition · Pest control ?	Consumption · Exhibition	-	-		
In	19	有鱗目 Squamata	クサリヘビ科 Viperidae	サキシマハブ	Protobothrops elegans	Exhibition · Consumption	Exhibition · Consumption	-	-		

一部を除き2025年6月現在の情報による。

英訳は参考であり、日本語を正とする

1) Ex : 海外原産の動物、In : 国内由来の動物

2) 国内の発症事例による。

作成協力 : いであ株式会社

Except for some items, the information is current as of June 2025.

The English translation is for reference only; the Japanese text takes precedence.

1) Ex: Alien species introduced from abroad、In: Domestically introduced alien species

2) Based on domestic case reports

This table was prepared based on survey data provided by IDEA Consultants, Inc.

鹿児島県 Kagoshima		
宮崎県 Miyazaki		
大分県 Oita		
長崎県 Nagasaki		
佐賀県 Saga		
福岡県 Fukuoka		
高知県 Kochi		
愛媛県 Ehime		
香川県 Kagawa		
徳島県 Tokushima		
三重県 Mie		
滋賀県 Shiga		
愛知県 Aichi		
静岡県 Shizuoka		
岐阜県 Gifu		
長野県 Nagano		
福井県 Fukui		
石川県 Ishikawa		
神奈川県 Kanagawa		
東京都 Tokyo		
千葉県 Chiba		
群馬県 Gunma		
栃木県 Tochigi		
茨城県 Ibaraki		
福島県 Fukushima		
三陸県 Yamagata		

表1C 対応表：各都道府県の外来種の分類と本稿における分類

Table 1C : Crosswalk Table: Classification of Alien Species by Prefecture and by This Report

		Hokkaido 北海道	Aomori 青森県	Yamagata 山形県	Fukushima 福島県	Ibaraki 茨城県	Tochigi 栃木県	Gunma 群馬県	Chiba 千葉県	Tokyo 東京都*	Kanagawa 神奈川県*	Ishikawa 石川県*	
①	定着しており対策が必要な外来種 Established alien species requiring management	A1	Af	特定外来生物 IAS	緊急対策外来種 Alien species requiring emergency measures	1 定着 Established	優先対策種 Priority or Pity species for management measures	定着/対策優先種 established/priority management species	A	防除推進外来種 Alien species for promoted control	防除種 control target species	○防除実施 Control implemented	
①		A2	Ad		重点対策外来種 Priority alien species for management		対策検討種 species for management consideration			防除検討外来種 Alien species for control consideration	準防除種 provisional control species	○	
①		A3											
②	定着しているが特に影響が確認されていない、または小さい外来種 Established alien species with no confirmed impact or only minimal impact	B	Bf					定着/その他の種 established/other species					
②			Bd										
③	定着していない（または不明だ）が予防が必要な外来種 Not established (or establishment uncertain) alien species requiring preventive measures	C	Cf			3 注視 Watching	侵入等警戒外来種 Alien species under alert for invasion	侵入/対策優先種 invasion/priority management species	B	侵入予防外来種 Alien species for invasion prevention	侵入監視種 Species under invasion monitoring	△	
③		E	Cd					未確認/侵入警戒種 unconfirmed/alert species	C	定着防止外来種 Alien species for prevention of establishment	準侵入監視種 Provisional invasion monitoring species		
③		H	Ef										
③		h	Ed										
④	その他 Others	D	Df	産業管理外来種 Alien species under industrial management	2 未定着 Not established		侵入/その他の種 Invaded species/other species		D	産業管理外来種 Alien species under industrial management	対応困難 Difficult-to-address species		
④		F	Dd	その他の総合対策外来種 Other alien species for comprehensive management measures			未確認/その他の種 Unconfirmed/other species		DD				
④		G	Lp	○（ブルーリスト掲載種） Blue-list species									
④		I											
④		J											
④		K											

	Fukui 福井県	Gifu 岐阜県*	Nagano 長野県	Shizuoka 静岡県	Aichi 愛知県	Shiga 滋賀県	Kyoto 京都府	Osaka 大阪府	Hyogo 兵庫県	Nara 奈良県	Wakayama 和歌山県
福井県内の野外で確認された特定外来生物 IAS confirmed in the wild in Fukui pref.	総合対策外来種 Alien species requiring integrated management measures	総合対策外来種 Alien species requiring integrated management measures	特定外来生物 IAS	愛知県外来種リスト Specied listed on the Aichi alien species list	強影響外来種 High impact alien species	被害甚大種 Severe impact species	特定外来生物アラートリスト Species on the IAS alert list	Z警戒種 Alert species	定着種 Established species	防除対策外来種 Alien species for control measures	
						中影響外来種 Medium impact alien species	被害危惧種 potential impact species				重点啓発外来種 Priority alien species for public awareness
						一般外来種 General alien species					
		定着予防外来種 Alien species for prevention of establishment	定着予防外来種 Alien species for prevention of establishment		愛知県注意種リスト Aichi-watching list species	侵入警戒外来種 Alien species under alert for invasion	準被害危惧種 provisional potential impact species		Y注意種 Watchlist species	記録種 recorded species	
							要注目種 species of note				
		産業管理外来種 Alien species under industrial management	産業管理外来種 Alien species under industrial management			確認記録外来種 Recorded alien species	情報不足種 data-deficient species				産業利用外来種 Alien species for industrial use
											無印 Not marked

表1C 対応表：各都道府県の外来種の分類と本稿における分類（つづき）

Table 1C : Crosswalk Table : Classification of Alien Species by Prefecture and by This Report (Continued)

		鳥取県 Tottori	島根県 Shimane	山口県 Yamaguchi	徳島県* Tokushima	香川県 Kagawa	高知県 Kochi	福岡県 Fukuoka	佐賀県 Saga	長崎県 Nagasaki	
①	定着しており対策が必要な外来種 Established alien species requiring management	◎影響大 ◎High impact	◎影響大 ◎High impact	定着種 Established species	定着・繁殖/危険外来種 Established & self-sustaining species/ Hazardous species	緊急対策外来種 Alien species requiring emergency measures	防除対策外来種 Alien species for control measures	重点対策外来種 Priority alien species for management	移入規制種 regulated introduced species	I	
①		○懸念あり Species of concern	○影響あり Impactful species			重点対策外来種 Priority alien species for management	重点啓発外来種 Priority alien species for public awareness	要対策外来種 Alien species requiring management measures		II	
①											
②	定着しているが特に影響が確認されていない、または小さい外来種 Established alien species with no confirmed impact or only minimal impact				定着・繁殖/要注意外来種 Established & self-sustaining watchlist alien species	その他の総合対策外来種 Other alien species requiring integrated management measures		要注意外種 Watchlist alien species		III	
②										IV	
③	定着していない（または不明だ）が予防が必要な外来種 Not established (or establishment uncertain) alien species requiring preventive measures				未定着/定着予防外来種 Not established/ Established alien species for prevention of establishment	侵入予防外来種 Alien species for invasion prevention	定着予防外来種 Alien species for prevention of establishment	定着予防外来種 Alien species for prevention of establishment			
③					不明/定着予防外来種 Unknown/Alien species for prevention of establishment	その他の定着予防外来種 Others alien species for prevention of establishment					
③					不明/危険外来種 Unknown/Hazardous alien species	特別選定種 Specially designated species					
③											
④	その他 Others	△不明 Unknown	△不明 Unknown	記録種 Recorded species		産業管理外来種 Alien species under industrial management	産業管理外来種 Alien species under industrial management				
④											
④											
④											
④											
④											
④											

一部(*)を除き2025年6月現在の情報による。

英訳は参考であり、日本語を正とする

作成協力：いであ株式会社

Except for some items(*), the information is current as of June 2025.

The English translation is for reference only; the Japanese text takes precedence.

This table was prepared based on survey data provided by IDEA Consultants, Inc.

著者

WWFジャパン 野生生物グループ

発行日

2026年2月20日（初版）

発行所

WWFジャパン（公益財団法人世界自然保護基金ジャパン）

東京都港区三田1- 4 -28 三田国際ビル3階

本件に関するお問い合わせ

WWFジャパン 野生生物グループ

wildlife@wwf.or.jp / Tel: 03-3769-1713



WWFジャパン

WWFは100カ国以上で活動している環境保全団体で、1961年に設立されました。人と自然が調和して生きられる未来をめざして、失われつつある生物多様性の豊かさの回復や、地球温暖化防止などの活動を行なっています。

無断転載をお断りします。

転載をご希望の場合はWWFジャパンまでご一報ください。





環境省提供



環境省提供



人と野生生物が
共に自然の恵みを受け続けられる
世界を目指して活動しています

together possible.™ wwf.or.jp

WWF® and ©1986 Panda Symbol are owned by WWF. All rights reserved.

WWF Japan (公財)世界自然保護基金ジャパン
東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル3階

詳細やお問い合わせについては
WWFのウェブサイトwww.wwf.or.jpをご覧ください